

【翻 訳】

ゲオルク・クリストフ・リヒテンベルクの ホガース銅版画の詳細な解説 第一分冊

吉 用 宣 二

ホガースは正当に評価されていない、しかし将来、満腔の賞賛が彼に与えられることになるだろう。(英語) チャールズ・チャーチル [1731-1764]

前書き

ここに私はドイツの読者たちにホガース銅版画の解説の最初の分冊をお渡しする。私はその解説に、天才のこれらの作品についての私の現在の知識に従えば私に可能である限り多くの完全性を与えようと試みた。この解説は、私が知っている最良の解釈者の中で私が注目すべきものと見なしたすべてのものを含んでいるばかりか、さらにまた、ロンドンとドイツの幾人かの友人たち [イギリス人の友人には Irvy, Hawkins, ドイツ人には Eschenburg が考えられる] の発言と私自身の発言も含んでいる。私は、この解説を世界に提供することに不安がないわけではないと告白しなければならない。一つ以上の理由から。ポケットカレンダー [ゲッティンゲンポケットカレンダーに 1783 年以來] の中のこれらの作品についての私の解説は拍手喝采でもって受け入れられた。ひょっとしたらそれが、人々がすぐに投げ捨てる小冊子の中で、私によって投げ捨てられたもののように見えるので。私が大まじめに与えたものを人々は、私が大まじめであるならば、成し遂げることができるであろうもの見本と見なした。だからあの賞賛は受けるに値する報酬よりはむしろ励ましであっただろう、そして今この大まじめが挫折させている希望に基づいていたのだろう。というのは、実際には事態は私のもとではまったく逆であったからだ。私がそこで与えたものはもちろん見本であった、それらはしかし時として、私を与えるべく持っていた最良のものであった。そして私がそれらをすぐに投げ捨てられる小冊子に書いたということは、その朗読にとって不利であるよりはむしろ有利であった。ドイツの読者大衆の荘厳な謁見の広間、その王座の前で私はいま私の発言を書き留めているのだが、その広間は当時私の頭に思い浮かばなかった。私はただ隣

の部屋の椅子、窓際のベンチ、茶卓のことだけを考えた、あるいはせいぜいのところその上に私のクリスマスの贈り物を持って来る天使〔聖なるキリスト *Der heilige Christ* とリヒテンベルクはポケットカレンダーのことを呼んだ。それを彼は友人たちにクリスマスの贈り物として送った〕が降りてくるだろう控えの間のそれらを。私はだから、無心にのんきに書いた、それはなるほどいくつかの間違ひのために余地を与えるのだが、しかしそのようなものごとの場合の朗読には特別に好都合なのである。朗読はそれによって最善の調子を受け取るばかりでなく、最善の調子をまた守るのである。*無頓着さ incuriae* の誤りは最後に訂正される - *後からの慎重さ curas posteriores* によって。しかしながら誤った調子は、最後になって初めてそれが誤っていたと見出されることがなければ、訂正されない。全体は新たに構成されなければならない。この側面から私は一番恐れるのである。私はもっと明確に表現したい。

ホガースの作品を解説するためにただ二つの道が存在している、と私は思う。第一の道の上で人々は、ものごとが意味していることをただ短い、そっけない言葉で言っただけだ。そして特にその芸術家の国、あるいは彼の天才を知っていない人がまったく見落とすか、あるいは、彼がそれに気づいたにしても、ふさわしく理解しなかった事柄に注目させた。その道を、私とその表現を利用するのであれば、*散文的な道*と呼ぶことができるだろう。というのは、また*詩的な道*も存在するからだ。詩的な道の上では散文的な道の上で行われたこととすべてが為されなければならない、さらにまた一つの言語の中で、そして芸術家の気分 [*Laune*] と可能な限り多くの類似性をもっていて、それと同じ歩調をする気分が活気づける表現の仕方の中で。芸術家がそこで描いたものはまた彼が、もし彼が銅版彫刻鑿を扱うようにペンを使うことができたならば、それをひょっとしたら言ったであろうように言われなければならないだろう。彼が自分の祖国の悪徳と愚かさに向時たいそうおびただしく与えた打撃に一つの小さな方向転換によって一つの方向が与えられることができるだろう、その結果、それらの打撃のいくらかが最近の人たちの頭の上にも落ちるのである。ただ明らかであるが、個人 [*individua*] の上にはなく、つねに階級の上に。この道の上ではまったく説教されることはできないだろう。日常 - 道徳の何も、日曜 - 信心深さの何もない、そしてお願いだ！ トランケンバール宣教 - 散文もなし [*Trankenbar*, インドの東海岸に位置する, 17-19世紀にデンマークの植民地で, プロテスタント信仰の宣教が18世紀に行われた]。ホガースの気分的なからかいに対してまじめな道徳を教えようとすることは、彼の悪徳と愚かさへの風刺を道徳自体への風刺に変えることであろう。クニッテル詩形 [*Knittel-Versen*。1行4抑揚を有し, 2行づつ韻を踏む] の中ではとても多く良いことが言われる。それでもって悪習と愚かさ、血が出るくらいの打撃が与えられる。まさにそれがクニッテル詩形であるがゆえに。

しかし人は祈ることをしようとしてはならない — クニュッテル詩形の中では。それは祈りについての嘲笑であろう、そしてだからとても無意味なことであろう。

この仕方では詳論されると、ホガースは誰にでも理解できるものになるばかりか、各々の人の精神は解説の叙述によって彼の意に反して、これらの版画が与えることができる大きな精神的な喜びを享受することができる気持ちになるのである。

さてこの道はもちろん困難である。私が（ほとんど私は残念ながら！と付け加えるところろだった）取ったこの道は、*Hinc illae lacrimae*！ それ故にあれらの涙 [ラテン語、テレンティウス]。しかしそれはいまや起こってしまった。そして私は私の理解力の判断を待たねばならない、私がおの道を取ったことがどれくらい成功したか。あのモットーを考えると私は確信を持ってないのだが、その時に私を慰めるものは主として二つである。第一に、私はこの道を試みた最初の人間であるということ。[最初の解説は1783年秋にゲッティンゲンポケットカレンダーに現れた]。私はドイツにおいてもイギリス、他のどこかの国においても前任者を持っていない。というのは、アイルランド氏 [John Ireland -1800, イギリスの作家、銅版画家] が同じ道の上でなしたことは、ここでの私の最初の試みよりも七年後だった。そして私がおの点で良いことを為したならば、最善のことはすでになされていた、そして私がおの作品を見る前にすでに調子は提示されていた。そのうえ、この男の努力は、彼がおのイギリスの前任者すべてを後方に引き離しているにもかかわらず、彼がお私の前任者であったにしても私がおを模倣できなかつたような性質を持つものである。彼は多くの知識にもかかわらず、そして機知にもかかわらず、そして彼の雑多な詩句の中から輝き出る気分にもかかわらず、彼の叙述の中で大いに、大いにあまりに祝祭的である。彼のペガソス *Pegasus* [天馬] (というのは、彼は彼がお行くべきところに常に旅したから) は、どの機会にでも、ゆっくりした—荘重なそして祝祭的—スペイン的な王冠—元帥 [Kron-Marschall]—速歩になる。その速歩は彼がお率いている行列には似合わない。人々は旗手と行列を忘れる。そしてただ彼の辮髪がおかしな拍子をとるのを見る。私は私の解説の中でまた羽目はずしている、しかし私がお信じるように常に目的にかなっている。それに対してアイルランド氏は少しの原因もなく（あるいは、ひょっとしたら、一つの単なる言葉遊びのゆえに）領主の館の庭園とその滑稽な劇場 [ハノーファーの夏の離宮の大庭園] の中に紛れ込む。彼は詩句と物語を教えるが、それらは何も解説していない、むしろ、精神を主要意図から遠ざける。精神はそのような誤った乗馬のあとで再び考えを集中するのに苦勞するのである。要するに、私がおアイルランド氏の否定されない能力を彼がおそこで為したものと比較するならば、私には以下のことが確かであるように見える。すなわち、彼は彼の注釈の際に、少ブリニウス [Plinius] が手紙の際にその状況にいたとまさに率直に、機知に富んだ仕方でお告白しているのと同じ状況にい

たと。「彼は短い手紙を書く時間を持たなかった、それ故に広大な手紙を書いた」。

私を慰める第二のことは私がここで読者に閲覽に供するホガース作品の部分はその重さと大きさによれば全体を顧慮するとごくわずかであるということである。大きな道徳的な傾向の彼の作品のすべて、それだけに彼は彼の不滅性を感謝しなければならないのだが、それらはまだ残されている。私はだから、続ける前に、教えとそれ故に改善のために十分の余地を持っている。－ その余地が正当である、あるいは不当であるという非難に対して私はなるほど答えることができない、しかし私は、どの作家も啓蒙された読者の判断に対して示さなければならない敬意とともに、私に向けられるどの言葉も静かに利用するだろうということとを約束する。

この二重の慰め、あるいはあなたがそう言いたければ、この二重の言い訳に私は第三のものを付け加える。それはもちろん慰めでも言い訳でもない、しかし正当な裁判官から穏健な判断を促すことができる。私が、自発的にこれらの発言でもって世間に登場するのではないと言うならば、それはまったく作家的な気取りではない。私は一部は公的に、一部は手紙の中で、一部は口頭の説得によって、強制されたと言いたくないが、特にそれへのきっかけを与えられたのである。私は、私の友人たちの多く－彼ら自身がきっかけであったが－が執筆の際に私のために感じるであろうことを、良くそしてひょっとしたらその執筆のためにあまりにも生き生きと感じた。若干の年月の中で若干の結びつきの中で若干のものごとについてただ若干のものごとだけが言われる。そして私はこれらの若干の四倍の圧力を、残念ながら私が恐れるように、あまりに強く感じた。しかし私はとにかく私の収集をした。私のイギリス人との頻繁な交際とその国自体についての私の知識はこの点で、ひょっとしたら知られていないままでとどまっただろう多くのことを私に明らかにした。だから、私が持っていたものをこれらの作品の将来の完全な解説への若干の寄与として書き留めることは苦労に値するだろう。そしてその時私には、私の惨めな生の今の時が、私のひどく揺れる健康状態にもかかわらずいまお役に立つ時であるように見えたのだ。もっと良い健康状態の際には私はそのようなことを企てる気持ちにならないだろう、もっと悪い健康状態の際にはそのようなことを企てることができないだろう。私はすべての公正な読者に特にこれを考慮することをお願いする。この前書きのその部分を心に留めることを私は私自身の平静のゆえに特にすべての読者に勧める。あるいは－私の友人たちは彼らがしたことを眺めるかもしれないが－私は無実である。

さらに全体に関していくつかのことを。ホガースは時おりとても気まぐれ [mutwillig] である。その気まぐれは二義性によるのだが、その二義性は各々の解釈によって二義性を失う、それ故に、そのもとに二義性がまだ読者の目に示されることができた保護全体を失う。それ

はもちろんホガースの解説者にとって危険な状況である。しかし私はしかるべき仕方であやうく難を逃れたと思う。そのようなものごとをドーフィネの使用のために *in usum Delphini* [17世紀にフランスのドーフィネの知事の命令で卑猥な個所がテキストから除去された古典作家の版] 完全に無視することを私は得策と見なさない。それは実際に人がすることができる最悪のことである。旧約聖書はドーフィネの使用のためにあるのだろうか。そして哀れな古典作家 *autores classicos* [この古典作家の手直しにボシエ Bossuet, ユエ Huet, ダシエ夫人 Mme. Dacier が関与した] を去勢することはフランスでは何の役に立ったのか。そして彼らをドーフィネの使用のために切断することは何の役に立つことができたのか。一方で、同じ使用のために *in eundem usum* クローク系の女性は彼女らがいたところにとどまった。それはすべて何でもなしのことだ。おお愛しい青春は、すでに混乱している老年が信じているほど、混乱していない。過大に恐れるな、そして、自分の確実さを前提する手段によって推定上の墮落に立ち向かうな。ありがたいことに、多くの場合、老人のこの知恵が青春にとって一つの愚かさにとどまるということは、幸運である。その知恵は、青春が知恵を理解するならば失われるだろう。知らされているように、教えることにより *docendo* あるいは習慣をやめさせることにより *dedocendo* は同じではないのか。私はこの当惑の中から、それが起こるときに自分を引っぱり出したことを希望する、それが自身が父親である名誉の男から [1790年代のリヒテンベルクの父親イデオロギー] 期待されるばかりでなく、厳格に要求されることができるように。ここで軽率な気まぐれを具体的に描写する *ausmalen* ことによって考え続けることができる人は、その結果を彼自身の家の中で体験するに値する。そしてこれよりもっと大きな呪いを本当に私は知らない。

私は解説の中で人物へのすべての非難をまったくやめた。何度も私がおそのための機会を持ったにしても、あるいは容易にそのための機会を取ることができたにしても。ある人間たちに彼らの文字によるのと同様に口頭でいままで私に示された親切な助力のために一つの小さな感謝を注がせるという機会を。そのすべてはここでは忘れられている。私の意図は単に、すべての読者に、友人や敵に、かつてクロッツ派 [Christian Adolf Klotz 1738-1771] の職人—決まり文句が称したように、不俟な時間をではなく、快適な時間を作ることであった。自分のことが言われていると感じる誰がいるとすれば、それを私は望みも恐れもしないが、私は彼をただエラスムスの言葉によって慰めることができる。自分のことが言われていると感じる誰かいるとすれば、その人は良心の呵責かあるいは確かに不安を示している *Si quis exstierit, qui sese laesum clamabit, is aut conscientiam prodet suam aut certe metum* (ラテン語。「痴愚神礼賛」)。私は何も意識していない。

さらに私は、私にかつてなされた非難に対処しなければならない。まるで私がホガースの

作品の中に、彼が決して考えなかった意図を見出したかのような。そうかもしれない。しかしそれは一つの書物の中で何の害になるだろうか、意図が偉大な芸術家の作品の上に光を広げるためにそこにあるにもかかわらず、同時にそれ固有の歩みをする書物の中で。私がそこにあるものを何も無視 [wegdenken] しなかった、解説から外さ [wegklären] なかったならば、私は自分が欲することを含めて考えたかもしれない。私はそのように見えるすべてのものを解説と称したわけではない。美的なセンスを持つどの読者もそのような場合にはすぐに私の意図がなにであったかを見出すだろう。そうしておそらくホガースは例えば、彼が第六の版画において刈るためのナイフ [Schermesser] に、それが持っていない形を与えたとき、路上のフリーメーソンの山形鉄のことを考えなかった [Winkelleisen 山形鉄はフリーメーソンの印]。しかし比較をすることは、次に続く発言に導く転換として許されている。似たような特徴を読者は頻繁に私のテキストの中に見出すだろう。しかしこの作品の中で性急さに用心してください、そして各々の発言を、それが最初に見るときにはわざとらしく [gesucht] 見えるので、すぐに不自然あるいは偽りと見なさないでください。初めに全体からこの奇妙な天才の精神について知識を持ちなさい。そのようにしてあなたは発言を自然であると思うだろう。

われわれのリーベンハウッゼン氏 [Ernst Ludwig Riepenhausen 1762-1840] の複製に読者が満足するだろうと私は希望する。それは私が少なくともかつて見た最も完全な複製である。一つの顔立ちも失われなかった。喜びとともに人々は、彼がイギリス人の流儀全体に近づくとき、早い進歩に気付く。彼がここではその流儀にまだ完全には達していなかったにしても。夜と正午は私がそれらに言及する順序の中では彼の当時の仕事の最後のものである。これは将来のためにとても多くを希望させる。

初めに私は、作品のために全体への序論を芸術家の生と彼の芸術家－性格の描写などとともに前もって述べることを意図していた。しかし私はそのための時間が足りないだろうとすぐに気づいた。だから私はそれを将来に延期しなければならない、それは、いずれにせよ分冊で現れる本の場合に害にならない。これは直ちに、読者が置きたいところに置くことができる一冊の独立した巻を形成するだろう。私は描写においてしばしば私の前任者を引き合いに出したので、私はここで終わりに、私が利用した本の名を挙げる。それらの価値と性格の詳細な決定とかかりあうことなく。その決定は本来は序論の中にその適切な個所を見出すべきであったのだが。

- 1) **氏のパリの友人の一人への手紙。ホガース氏の版画を説明するために [仏語] パリ 1748 年、八つ折り判。そこに名前が記されていない著者はアンドレ・ロケ André Rauquet [1701-1758 30 年間ロンドンに滞在した]、ロンドン在住のフランス人の細

密画の画家 [Scmelz-maler] である。それらはベリル Belleisle 元帥 [Charles Louis Auguste Fouquet 1684-1761] のために彼のイギリスでの捕虜の状態の中での楽しみのために書かれた。それらはホガースの四枚の版画についてだけ本来的な解説を含んでいる。それらはすべて注目に値する、著者はホガースの隣人であり、これらの手紙について恐らく知っていたので。

- 2) *Hogath moralized* 道徳的に説明されたホガース (verkuhbacht : 訂正するつもりでかえって悪くされた。[Cubach という名前からの造語])。ジョン・トラスラー *John Trusler* 師 [1735-1820 イギリスの聖職者, 医者, 印刷業者, 著述家] による。ロンドン, 1768 年, 八つ折り判, 80 の銅版画とともに。とても多くの本当に良い発言を含んでいる。
- 3) 版画についてのエッセー ウィリアム・ギルピン *William Gilpin* 師 [1724-1804 イギリスの聖職者, 素描家]。「だらしのない男の生活」についての解説だけを含んでいる。私はそのドイツ語の翻訳だけを持っている。銅版画についての論文 フランクフルトとライプチヒ, 1768 年, 八つ折り判。著者はタイトルの上にも, 前書きにも名を挙げられていない。
- 4) イギリスにおける版画についての逸話 ジョージ・ヴァーチュエ *George Vertue* [1684-1756 版画家] によって集められた, そしてホルス・ウォルポール *Horace Walpole* (現在の *Oxford* 卿) によって要約された。ストローベリーヒル 1771 年, 四つ折り判。全五巻の中の第四巻。作品のプランに従えば, ただわずかだが, しかし優れている。
- 5) ウィリアム ホガースの伝記的な逸話 第三版 ロンドン。1785 年, 大 (gr.) 八つ折り判。すでに第四版がある。著者は有名な印刷業者, 書籍商ジョン・ニコルズ *John Nichols* [1745-1826]。とても良い。
- 6) ホガースの版画のいくつかの解説 パリ ロンドン 1785 年 八つ折り判。著者の名前なし。私が時おり語るのはその匿名の人についてである。彼は前任者が持っていない多くのものを持っている。彼はまた時として, 必ずしもとても繊細な種類のものではない気分とともに語る。それはもちろんまたホガース的である。
- 7) ジョン・アイルランドによって解説されたホガース。二巻 [II Voll]。大八つ折り判。ロンドン 1791 年。多数の銅版画とともに。疑いもなく最も完全なもの, そしてもったいぶった叙述を差し引けば, もっとも優れた本。すでに第二版が存在している。それはしかし, 私が新聞から見て取るように, ほんの少しの取るに足らない補足を受けとったものだ。

読者たちはここからホガースの解釈者たちの中に二人の神学者がいることを見て、喜びを禁じ得ないだろう。両党派が要求できる匿名氏は計算に入れずに。そしてその匿名氏はギルピンのように最後には尊敬すべき側に転じる。私はまたそこに不適切なものを見ない。尊い身分の男たちがすべてを説明できないにしても、彼らは一つの側から功績のある名声を持っているし、別の側から除外する権利を持っている。とりわけそれが事柄についての否定されない知識によって支えられているときには、存在しているものに最善の言い回しを、そして特に二義性にもっともふさわしい解釈を与える権利を。

それらの正確な文献の他に私は以下の全紙の中に現れるとても多くのことをすべての身分と年齢のイギリス人の授業に感謝しなければならない、彼らとともに私はホガースの作品をロンドンと同様にここにおいても通読したのである。ドイツでは私は宮廷顧問官のエッセンブルク氏 [Johann Joachim Eschenburg 1743-1820, 文学教授, シェークスピアの翻訳がある] に特別な感謝をしなければならない、彼はとりわけ将来の分冊のいくつかのために優れた指示でもって援助された。

私はゲッティンゲンカレンダーのすべての読者と同様にこれらの冊子のすべての読者に、それが仰々しくなくなされる限り、公的あるいは私的に好意をもって私を援助することを願う。私は常に推敲する際にも、必要な補足においても、感謝とともにそれを利用するだろう。というのは、ただこの道においてのみ最後に天才のそのような生産物について完全なことが期待されるのである。この作品の中で明瞭に見た一對の眼が永遠に閉ざされたとき、そして私の知る限り、彼の位置を代理できる一つの眼も存在しないとき、われわれは、個々に力に関して欠けているものを眼の数と優位によって代理することを試みなければならない。

機知の作品はそもそも悲しい性質のものである。それは大抵腐敗しやすいものと腐敗しないものを含んでいる。それらのとても内的な結合に機知の作品の生全体と作用の豊かさが必然的に依存しているのだ。だからわれわれに天才の作品の中で（それらの作品のもとでそれはわれわれに可能である）できる限り細心に腐敗するものを腐敗から守らせよ、そして後世の使用のために保存させよ。後世は他の部分をわれわれの助力なしに無料で自然から受け取る。

私はもちろんまた腐敗しやすい保存手段でもってホガースの天然の産物のとてもはかない部分のいくつかを以下の紙面の中で維持することを試みたのだが、その腐敗しやすい保存手段のわずかを使用することがそれらを少なくとも数年先にまで進ませるならば、それは私を果てしなく喜ばせるだろう。

次の聖ミカエルの祝日の見本市 [九月二十九日, ライプチヒ) に第二分冊が現れる、それ

は六つの版画の他に「当世風の結婚」を含むだろう。

ゲッティンゲン 1794 年。

Strolling Actresses Dressing in a Barn

巡業する女優たち [Komödiantinnen]

納屋の中で衣装を着る

ひょっとしたら、彫刻用の針と筆が風刺のために利用されて以来、ここにおけるほど多くの陽気な気分がそんなに小さな空間の中にぎっしりと詰められたことはなかったかもしれない。滑稽なからかいの一つ、あるいはいくつかの筆致をカードで覆うことなしに、オンバ [Lomber, 三人でするトランプ遊び] のカードをこの版画の上に投げることはできないだろう。ケレス [Ceres, ギリシア神話の農作物の成長の女神] のこの聖域のすべての隅が強力な風刺の現前を告知している。道化者は下の打穀場で走っている、一方で真ん中では気取って歩いている、そして上の納屋の中でひどく微笑んでいる - 雲の中から。笑わせる題材のそのような恵みがここでほとんどただ自分だけのために、もっと高い目的なしに焼け落ちていることは永遠に残念である、と人々は言う。なんと多くのものがこの火のもとで暖められることができたろうか。それはしかしひょっとしたら貧困の嘆きである。そんなに不安げに天才を考慮に入れる [rechnen] な、そして天国と同じくらい天才と口論する [rechten] な。というのは、両者の間の密かな往来はおそらくとても遠くまで及んでいるからだ。

その作品は納屋の中で衣装を着る女優たちという標題を持っている。だから単に女優たちであり、俳優たちではない。どうしてホガースはそのようなことを書くことができたのか、明らかに男性がその中にいるのに、と人々は尋ねた。だから明らかに？ それはひょっとしたら単に男の像でないだろうか。これは、この何でもできる人を知っている誰もがさしあたり一度はすることになる問いである。できるなら、この男のデッサンのあれこれを非難せよ、光と影のしばしば悪い配分を、そしてグループ分けを非難せよ。しかし彼の思い付きの非難を、それが容易になればなるほど、いっそう控えめにせよ。おお何度彼は私をだまさなかったことか。今、そこの鶏小屋の前に狐が死んで横たわっている、そしてすでにおいがすると人が私に言うならば、私はいつも最初に尋ねる、君たちはまた、そのいたずら者はまた自分に香水を振りかけたばかりでなく、待ち伏せしているということを確認しているのか。ホガースがこの表題でもって何かを主張したということは、そのような男の場合、問題ではない、しかし彼がそれでもって主張したかもしれないことは調べられなければならない。そのような性の調査がデリケートなことであれ。あのユニークな d'Econ 嬢を考えてみよ、それ

は何という活動であったか！ [それは、リヒテンベルクがが仮定しているように、女性ではなく、Chevalier d'Econ 1728-1810, ルイ15世のもとでの外交官である。彼はしばしば女装して登場し、その本当の性について賭けがされ、裁判が行われた] そしてここにわれわれはその上これらのお嬢さんの三人を持っている。とにかくわれわれは見たい。私は率直に調べるだろう。というのは、私は、それが印刷所に行く前に、私がすべての原稿を読ませる厳密な、冷酷な検閲官を信頼しているから。そしてその検閲官は精神的価値に対する敬意という名前である。ひょっとしたら、その事柄は人々が思っている半分も悪くはない。われわれがこれについて一つの言葉を失う前に、われわれはもちろん人々ともっと近く知り合いにならねばならない。

ここのわれわれの漂鳥 [一地方内で小規模の季節移動をする鳥] (女優あるいは俳優、どちらでも) はすなわち今晚小さな喜劇を上演しようとしている、そのためにホガースは幸運にもポスターを保管していいた。つまりその二枚の見本がベッドの上にある、パンの残りのすぐ後ろに、割れた卵の隣に、おまると空っぽのズボンのもとに。これらの紙片が合わさっても4平方フィート [1平方フィートは8と10平方センチメートルの大きさ] 平面も覆っていないにもかかわらず、それらはしかし私が述べたばかりの家具、衣類と、通常は良い家政の中ではそれくらいの平方ルーテ [Rute, 2.87-4.67 cm] の中では同時に見られてはならない食料品と直接的に接触している。ここはいくらか狭い。それらの紙片の一番上の紙片、ただその冒頭の部分が見えるだけなのだが、それは告げている、ロンドンの劇場 (*Elsasser Capwein* [南アフリカ、ケープ州産のワイン]) の俳優たちの一つの団体が今晚ワイン酒場で上演するだろうと。 *The devil to pay in heaven*[★], 天国での悪魔の騒ぎ。他の紙片からはただ下の端だけがぶら下がるようにのぞいている。そして少なくとも部分的には *Dramatis personae* 劇の登場人物を含んでいる。それらはユピテル、ユノ [ユピテルの妻]、ディアナ、フローラ、夜の女神、セイレン、アウロラ [曙の女神]、鷲、クビド、二人の悪魔、一人の霊とお供である。見てわかるように、そのポスターの上でもまた秩序はベッドの架台の上や建物全体の中でのようにいくらか強く抒情的である。ここでは上を下への大騒ぎだ [悪魔はすでにここで解き放たれている]。その紙片は幾つかの悲しい行を含んでいる。「旅回りの役者に対する議会法[1737年に公布]が発効する期日前に最後に」。だからそれはすぐに終わるだろう、ドイツで通常そうであるように、彼らが最後に三度か四度立て続けに上演すると仮定して。これらのあわれな人々を何かで救い出すことは難しいだろう、イギリスの法商人 [Rechtshändler] のとても緻密な銀彫刻技 [Silberstecherei] も救えないだろう。法律が、ドイツにおけように単に against strolling actors (旅回りの男役者に反対) というならば、彼女らはただ言うことができるだけだ、われわれはなるほど巡業しているが、しかしわれわれは女優者

だ。そして彼女らはしばらくは安全に、彼女らのロンドンの劇場の中でのように、彼女らの納屋の中にいるだろう。だからそれは *against strolling players* と称する、そしてこの言葉に対しては両性具有者一座も逆らえないだろう。しかし彼らが何をするか誰が知るだろうか。それは至るところで真実である、しかしイギリスよりもっと多く真実であるところはない。世界の中で正しいこと [recht] をするために、ただとてもわずかしかならないことが必要である。しかしながら安全に不正 [unrecht] をすることができたために、法を研究しなければならない。ひそかに議会-法案 [Akte] を考察しようとするものは、それが、おまるから遠くないところに、瓔珞ユリ [Kaiserkrone] の上にあるのを見るだろう。それはつまり瓔珞ユリと子供のかゆの入ったひび割れた熱い小鍋の間に押し込まれた。そうしてだから少なくとも、法律に対する敬意の不足を王冠に対する敬意と取り換えた。全体的な親愛なる集団についてそれくらい。今われわれは読者に人物を個別に披露するだろう。

- * チャールズ・コフィ Charles Coffey [-1745] とジョン・モットリー John Mottley [1692-1750] によって本来はただオペレッタに改作された笑劇、もともとはすでに 1686 年にトーマス・ジュヴオン Thomas Jevon [1652-1688。リヒテンベルクはコフィとモットリーの笑劇とジュヴオンの大成功の *The devil of a Wife* を混同している] という俳優によって書かれた笑劇、*The devil to pay or the metamorphosed Wives* - それがここでほめかされている -、それはよく知られているようにまた大きな喝采とともにわれわれの劇場にも移植された。変身した女たち。あるいは悪魔が解き放たれた。ホガスはひょっとして彼の変身をほめかしたかったのか。私はそれをあえて決定しようと思わない。イギリス人が、悪魔がタイトルの上にある、そんなにも多くの喜劇を持っていることは奇妙である。劇場必携 *Companion to the Playhouse* [1764] はそれらの十二の名を挙げている。一方、悪魔は登場人物の中では一番少なく現れる。悪魔は、彼の名が言われない多くの劇で、彼の特別な仲間を送る。

左のすぐのところには天の女王、ユノが座っている、頭には王冠、自分の前に本を持って。彼女は自分の役割を勉強している、そしてこの時あるいは別の時に利用するために、彼女は自分の見えない脚をひっくり返された手押し車の上に伸ばしている。そして星の衣装の夜の女神に永遠の長靴下を繕わせている。この女神は尊敬の念から彼女のランタンを消し、自分の隣に置いた。ホガスと夜の女神のなんと美しく、愛情の深いことか。ユノの長靴下の中の穴は光にふさわしくない。彼女は本をまったく新しいというのではないトランクの上で支えていた。というのは、実際に時はトランクからすでに、トランク自身がかつて哀れなアザラシから耳越しにはいだ [jm. das Fell über die Ohren ziehen: をだまして理を得るの意味もある) 毛皮の一部を再びもぎ取ったからである。トランクはふさわしく高いところにあるために、一番小さな面を土台にして立っている。だからおそらくその中には何も入っていない。トランク、ワインの樽などは通常そのような事情にある、つまりそれらが空の場合には、自分を高くする。 - その本は塩の缶にもたれかかっている。その缶のちょっと上げられた

ふたから木槌 [Welgerholz] が現れている。その世界自体の中でこれは台所のための器具類である。ここ天の控えの間の中でそれらは同時に、その他の音楽を拍子とガラガラなる楽器で支えるためにオーケストラのために保存される。それはひどく鈍感ではない耳にとって悪くは聞こえないと人々は言う。ホガースはササーク [Southwark] で年の市において、そこではまた喜劇も上演されたのだが、まさにこれらの楽器を利用した。それらはだから優れて旅回りのミュージックに固有のものであるように見える。それらは彼女の移動をひどく苦しめることはない、それらは安価で、台所と同時に楽団に仕える。塩の缶の裏側に何か白墨で書かれているの見える。おそらくミルクと黒ビール配達人のための検査 [Contre-Rolle]。この塩の缶のすぐ後ろに一つの普通の現世的な火をおこす機械、一つのみすぼらしい缶の中の鋼鉄と石、すべての火をおこす機械の最も崇高なもの、ユピテルの雷神の石矢と兄弟的に連結されたもの。なんとという考えか、そしてなんとというユピテルか！ 彼は、稲光と並んで、まだ一つの普通の火を起こす機械を持っている、例えば湿った天候の際に電気の実験がうまく行かないときに、打って光を出すことができるために。この石矢 [雷くさび] はトランクの上にとっても軽く一時的に平衡を保たれて横たわっている、それをおそらくユノの役割の中の次の感嘆符は一匹の哀れな猿の上に投げるだろう。この小さな劇中人物 [dramatis persona] は、イギリスの下層民の心情を喜ばせるために、ブルボン家の家系の名誉のために [ホガースのフランス嫌い Gallophobie はほとんどすべての作品の中で描かれ、リヒテンベルクによって全般的に時代政治的意味で利用される]、フランス風の髪袋 [18世紀の、男の髪型の粉を吹きかけられた辮髪のための黒い絹の袋、あるいは袋かつらの後ろ毛] やスペイン風の外套で飾りたてられている。自分の前に彼は他でもないアレクサンダー大王かぶとを持っている、そして兜の羽を恐れることなく、— その羽が誇り高く上下に揺れることはかつて全世界を震え上がらせたのだが — 彼はそれを家庭的な目的のために利用する。名を挙げられるよりはもっと容易に認識されるために。猿にとってその筋書きは実際に哲学的で大きい。その中には近代的なもの [Modernes] がある。その近代的なものは説明されるよりは容易に感じられる。人々は自問するかもしれない、誰が古フランク的な髪袋の下にそんなに多くの新フランク的な原則を探したのだろうか。そして顔！ おお、また雷神の石矢も落ちる。その賢者の顔つきはわれわれにとって証人である。

impavidum ferient ruinae

(全世界が打ち砕かれ、崩壊するならば) 瓦礫は恐れを知らない男にあたるだろう)

[ホラティウス]

今一つの推測。手押し車が同時に手押し - 雷の車であるならば、どうだろうか。石を積まれて、それはとても顕著に不ぞろいな半径のこの車輪のもとでゆるい厚板の上を導かれ、そ

の効果を確認にするだろう。オーケストラの中で奉仕をする手押し車と雷雲の上でまだ副次的な奉仕をする手押し車はすぐに演劇的な放浪者の家具調度によく適合する。雷神の石矢が漂っているところで、確かに雷は遠くない、それは落ちたい所に落ちるがよい。そのうえトランクが、まさにその中で激しいにわか雨と霰の嵐がここへの旅をしたそのトランクであるならば、このグループはそれによって名声と偉大さを獲得するだろう。その偉大さの描写はすべての散文 [Prose] を軽蔑するので、われわれはそれについて一言も言わないことにする。ちなみに夜の女神が一人の黒人女によって演じられるということを、ホガースは羊毛の髪によって十分明瞭に述べた。良い人たちはそれによって煤を節約できる、そして白いものをいたわる。家政のために一つの重要な事情。家政にあっては、背景に見られるように、洗うことと乾かすことは残念ながら！永久的である。

その版画の真ん中にディアナが輝いている

Velut inter ignes

Luna minores

もっと小さな星たちの中から

月のように [ラテン語、ホラティウス]

彼女の衣服は狩猟服と呼ばれるものではない。古代が彼女を描くさいに用いたすべての象徴の中で彼女には半月以外になにも残らなかった [ディアナは月の女神として崇拝された]。道徳的な象徴さえも消えてしまったように見える。この人物を観察すると意に反して考えたくなる。ホガースは、われわれが逆さまの世界を持つように、逆さまのディアナを描きたかったのだと。古代人のもとでは純潔なディアナと呼ばれていて、そしてまた現実にはふざけにくい女であったディアナは、ここでほとんどすべての城砦なしに立っている。外堡はすべて崩壊した。そしてそもそもとても軽率に設計されている内部の防壁でさえも、一つの側はおそろしい破れ穴である、その破れ穴に夜の女神は継ぎを当てなければならないだろう。彼女の頭からも降伏の白い旗が翻っている、かつてあるいたずらもの [リヒテンベルクのこと] がこれらの白いダチョウの羽をそう呼んだように。さらに二重にベルトでしめつけられた女 (bis cincta) [ディアナのこと] はどこでもベルトでしめつけられない女である。彼女のベルトはすべて解かれている、純潔の女神にとっては悲しい状態。そして最後に、古代人のディアナは膝の上まで露出した脚とともに、ちなみにとても細心に覆われて描写されていることが知られている。われわれのディアナはそれに対して、足から膝までを除いて、ほとんど完全に露出しているように見える。脚は純潔な性において通常そうであるよりもっと入念に覆われている。それはとても嫌なことである。その下のメドゥサの頭、すべてをわれわれよりもっとよく理解し、もっとよく見ているかもしてないそれは、純潔な女神のこのまった

く神話学的ではない振る舞いについて古本的な驚きを表しているように見える。それどころか、なぜ私は驚きと言うのか。メドゥサの頭はそれを見て初めて自分が硬直死をこうむるように見える。メドゥサ自身が他の場合には引き起こすのがふつうである硬直死を。

彼女は、髪型をいたわるために、乗馬用フロックの中に乗り込もうとしていたように見える。彼女が彼女の役割の繰り返しの際に雄弁な破裂 [Platzung] を要求する箇所につづいたとき。それによってディアナは押しとどめられた。ひょっとしたら、そのスカート自体がすでにほとんどしっかりと結ばれていた、そして雄弁な破裂はスカートの帯の破裂の結果としてもたらした。

今この哀れな女性の名誉回復のために幾つかの言葉を。ホガースが彼女を純潔の女神として悪い服装をさせたということは、本当である。少なくともとてもディアナにふさわしくないような。しかし自然は彼女のためにもっと多くを為したか。ディアナはほっそりとして、大きかった、至るところで頭一つ分だけ抜きんでいた。ここのわれわれのディアナは小太りで、肉づきがいい。そして物たちがこのように位置している場合、一つのとても重要な状況が起こる。頭と心がここで指尺の長さほどもっと近づく。哀れな温かい心が胸に抱いているものは、ここでそれがあるように哀れで温かいまま頭に達する。そして一つの幾何学的な指尺の長さは一つの道徳的なマイルとなる。おお！ すべてのひょろりと背の高いやせた人たちは幸いである。彼にあっては心の熱い陰謀は頭へのマイルの長さの道の上で冷却する時間を持つから。それ故に長い骨の体系は昔からすべての徳にとってではないが、多くの徳にとって押しつぶされた太った骨の体系よりももっと有利であった。彼女の眼と顔の全体は視線に対して無教養で粗野に見える。調査を邪魔するためにそんなに多くの視線 - 避雷針 [避雷針 Ableiter という概念とともに新しい言葉を形成するリヒテンベルクの好み] を彼女が張り付けたにせよ。そもそもディアナよりむしろケレス [Ceres 豊穡の女神] として、彼女はおそらくかつてこの打穀場あるいは別の打穀場で五脚抑揚格の無韻詩 *Black-Verse* よりももっと役にたつものを打穀しただろう。しかしながらこの女神が考古学者にとってほとんど教育的なものもそもそも見る価値のあるものも持っていないにしても、まさに彼女の今の水浴の衣装 [Badhabit] は特に村のアクタイオン [アルテミスの水浴中の谷間に入り、殺された猟師] の視線を引き付けたように見える。屋根の左側で中をのぞき見るアクタイオンの。アイルランド氏はその男はおそらく屋根を直さなければならなかったのその上に座っていると思っている。私は、彼はそこに彼自身の改善のゆえに座っていると思う。注釈者はそのようなものだ。

ディアナのすぐ前に、目下のところ花も豊穡の角もなく、花の神、フローラが座り、化粧をしている。彼女はろうそくの獣脂を自分の頭に塗っているのだが、そのろうそくを彼女は

新鮮な粘土からできた燭台から奪ってきた、その燭台は倒れて彼女の前の床の上にある。右手に彼女は胡椒缶★を持っている、花粉を開花する頭状花序の上にかくために。ふた付きのかごが彼女の机として仕えている、そのふた付きかごは一マルテル [Martel, 100-150 リットル] の穀物を入れることができるだろう。そしてこれは掛けられた紙片から見えるように、他ならぬその集まりの**宝石 Juwelen** [Jewels] を含んでいる。おそらく他のろうそくに点火するために用意されている燃えているろうそくはとてもいい加減に置かれていて、その炎は、その中にマルテルのケースの中の宝石が包まれている藁を襲っている、そして宝石ばかりでなく（というのは、最新の実験によれば、火の中のダイヤモンドは消え失せるからだ）、このパンテオン全体をそのすべての華麗さと一緒に爆発させるだろう、もし女神たちがそれに気づかなければ。だからここにすでに運命自体によってかき立てられて議会法の法律上の効力がかすかに光っている。彼女は自分の前に一つの鏡を立たせている、本来は単なる破片、そしてこの**鏡反射説 [katoptrisch]** 的な破片は完全ではない、というのは、それはあちこちに**透明な [dioptrisch]** 個所を持っているからである。そのすぐ近くに人間が一番小さな動物のかみ傷と戦うために、大陸の最大の動物の歯から切断し彫るすべを知っていた有名な道具がある、象牙の櫛が。しかしここで戦いは過酷で、勝利はしばしば疑わしいものであったに違いない。というのは、その櫛は、見えるように、その最良の歯のいくつかを噛み折ったからだ。そして花の女神の名誉のためにわれわれはここで、ホガースが**Aphides** [アブラムシ科の昆虫]★★を狙っていると考えなければならぬ、知られているようにしばしば花の女王の、つまりバラ青春的なうなじを覆っているしらみを。この庭の最初の飾りとの阻止されることができない交際によって、この有害小動物は、蚤やイエバエは一種の尊厳を獲得する。それは身分の高い有害小動物である。かごのふたの上の牡蠣の殻の中にひよっとしたらポマードバターが、あるいはそう思う人がいるように、この小さなバラのための色がある。

★ 本来は a dredger, 一つの缶, それらが焼かれているとき, すべてのものの上に小麦粉を撒くために。

★★ ドイツ語では Blattlaus, ありまき。

ディアナの後ろに一つの祭壇がある、その祭壇のわきで一組の小さな悪魔が黒ビールのジョッキを求めてボクシングしている。それが悪魔たちであるということは単に角によって見てとれる。というのは、角は彼らの頭巾に欠けているので。だからそのような頭の一組と一つの祭壇はまさに対比をなしていない、少なくとも異様な対比をなしていない。人々は彼らをとて有名な生き物 [僧のことが言われている] とみなすだろう。それらの生き物はすべての地方に繁栄し、彼らの自然史は二つの素晴らしい作品の中で論じられた★。そのグループは辛辣なしかしほとんど**世俗的な**風刺であふれている、その風刺は、ビールジョッキの代わりに足つきグラスを置くならば、誰でもすぐに理解できるだろう。ホガースの名誉のため

にわれわれはしかし、その嘲笑は人間にではなく、ただ人間の姿をした悪魔に関係しているということを考えるべきであろう。誠実な人々に対してホガースは反対するものを持っていない。というのは、彼自身がその一人であるから。第二番目の物に対してホガースは祭壇よりはむしろ祭壇への命令 [Kommando] を拳を丸めて打つ、そして最後にそのテーブルは決して祭壇 [Altar] ではなく、一つの単なる祭壇 [Ara。ここでは異教的な犠牲のテーブル] である。その上にまだあらゆる種類のもので横たわり、立っている。私は思うのだが、一個のパン、あるいはそれがあるところのもの、一つの脚付きグラス、一つのパイプから上昇するヴァージニアの香料。そのパイプをその飲んでいる男がおそらく両手で飲むために、降ろしたところだ。この燃えているパイプはまたふたなしにそのように横たわっているのだから、それは、脅かされた拳の突きが実現するならば、きっと落ちるだろう。そしてすぐに宝石箱のわきのろうそくとともに共同の作業をするだろう。

- * すなわち、1) Ioannis Physiophili: リンネの方法による初歩的な僧侶学 monachologiae, 図解された。万有知識 pansophia についてのテーゼの付録。など [PPP] (propria pecunia posit 自分のお金で設立された。自費出版) Fast etc. 1783年, 四つ折り判, maj. [著者は Ignaz Edler von Born]。そして、2) 僧の自然史, ビュフォンの方法によって書かれた。図解された。[著者は P.-M.-A. Broussomet 1761-1807] パリ 1793年 八つ折り判。

さらに左側、祭壇の後ろに、今一つ目の老婆が猫の美しい飾りをはさみで切っている、おそらく彼女が外套のところに持っている短剣が今晚この悲喜劇の中で引き起こすことになっている災いのためにも血を得るために。その手術はその老婆を喜ばしているように見える。そして彼女の微笑みの上に一組の笑い歯 *Lachzähncen* [笑うときに主に露出される一番前の歯はそのように呼ばれた] が現れる、その歯はもっと魅力的であることはできないだろう。それは、すでに先立って世を去った彼女のすべての兄弟姉妹たちの魅力の単独相続人である。そもそもこのグループの中に多く歯の遊戯 [Zähnsenspiel] がある。それらはほとんどすべての可能な意味において示され、むき出される。老婆によって、彼女の微笑みに優美さを与えるために。猫によって、噛むために。そして生贄を支えている哀れな綱渡り芸人の女によって、彼女の苦痛をかみつぶすために。彼女はそれが実現するように努力するだろう、というのは、その猫は歯でとても粗野に彼女の手にかみついたばかりか、また後ろ足で軽く覆われた下腹部-部分 *regionem hypogastricam* にもかみついたからである。その娘が満足として下ばきの露出部分の周囲に身につけているイチジクの葉のふくらみのすぐ上を。ラオコーンを考えることなしに、このじつと耐え忍ぶ女を描写することは不可能である。ベルヴェデーレ [Belvedere. 15世紀に建てられたヴァティカンの建物、古代の彫刻が展示されている] 中のそのグループをではなく - それは芸術の最高の尊厳の侮辱であろう -、そうではなくラオコーンが彼の息子たちと一緒に猿によってからかわれる、気分であらゆる [launevoll]

銅版画を。その老婆が何を表しているのか完全には正確にはわからない。魔女であることは難しい、というのは、彼女は猫の尾を切断しないから。彼女自身が妊娠することがあり得るだろうから。それはだからおそらく、その紙片の上で考えられる精霊である。これであるならば、短剣は自殺を狙っているだろう。さらにその老婆の経済は幾つかの行に値する。彼女はただ枝の端を切断し、主要な幹を、議会法にもかかわらず、将来の悲しみの場面のためにそのままにしておく。ここで教訓的なトラスラー Trusler [道徳的な解釈者] は大声で唱えるだろう、これを覚えておけ、おお君たち経済学者たちよと、もし彼がそのようなことを覚えておくことができるならば。 - この版画のその側面についてはこれくらいに。少なくとも生きている人たちについては。死んでいるものをわれわれは放っておこう。しかしそれはまた目をさまさせられなければならない、そして願わくば、生きているものの生を高めることがなくはなく。

純潔の女神の後ろに王冠を、本来は金色紙の太陽の縁、あるいはヒマワリの花の縁を頭の上にかぶった一つの像が立っている、それは一つの小さなはしごの上に立っているアモル[恋愛の神]に、雲の上で乾かされている一对の長靴下を取って来るか、裏返すことを命じている。この像はユピテルであると言われている。すべての解釈者がそれを断言している、そしてそれはありそうである、さもないとユピテルはここでただ喜劇紙片の上に立つだけであろうから。他に神々のうちで周知のごとくポイボス [アポロ] は洗濯物を乾かしている、*Jupiter pluvius* 雨を授けるユピテル はびしょぬれにすることとかかわりあっている。その像はまたポイボスを表すこともできるだろう。もちろんまた古代人のユピテルは後ろからは認識されるのが難しい。彼にあってはすべてが肯定的な側面に依っている。たとえ彼が否定的な側面から見られて、雄牛として現れても、そして単に頭のむきを変えるだけであっても、その神 [Numen] はただちにまたそこにいる。残念ながら！ この雄牛は考えられることはできない、そしてだからユピテルと見なされるかもしれない。だからゼウスは綱をさげずみ、彼の下着を雷雲の上に掛ける。なんと偉大な！ 彼がしたすべてはそのようであった。一方、それは彼自身にとっていくらか高すぎる場所に掛かっている、そしてそれが乾いているかどうか知るために、彼は彼のとても有名な翼のある召使を上を送る、そしてこの召使は自分の翼にもかかわらずはしごを使わなければならない。普通の生活の中にもはしごは愛の翼の代理を務める。それどころか彼の翼はほとんど役に立たないので、彼は最後の三ツォルの引き上げを足指の大きな苦勞とともに為さねばならない。しかしながらここでホガースはまったく完全な光とともにわれわれのところに戻って来たので引き続いての解説は彼をただ覆い隠すだけだろう。この版画全体が構成されている調子に対してアモルは盲目でも、裸でもない。彼は他の人の長靴下がどこにあるのかをとともよく見ている、そして彼の長靴下を

巻いて身につけている。

装飾品箱の後ろの右側に垂れ下がった髪をした悪くない顔立ちの娘が立っている。それはおそらく視線をいくらか曇らせている酒酔いの瞬膜 [Nickhaut。ほとんどすべての脊椎動物に存在している第三のまぶた、人間においては一つの小さな半月の形の襞に退化した] である。これは、彼女の腰の周りの帯によって垂直に立てられている魚の尾において見られるように、セイレンである。

彼は一匹の魚を上が良い形の女の姿で終わらせる [ホラーティウス 詩学]

Desinit in piscem mulier formosa superne

観想学は本当に国民的である、そしてイギリスの健康な農民の下ではとても普通である。右手に彼女は瓶を持っている、そして見てわかるように、歯の痛みを嘆いていて、すぐに厄介な [epineus : kitzlich] 検査の対象になるであろうデコン嬢 [Mamsell d'Econ, フランスの外交官で女装した] に一飲み of 慰めを与えようとしているところである。この水のニンフが火酒を注いでいるあいだ、若いアウロラ [Aurora あけぼのの女神] は頭の前にぴかぴかの明けの明星をもって、彼女の小さな金の口を愛情に満ちたふうにゆがめながら、スカーフにぶら下がったままである水昆虫 [Wasserinsekt] を折るのに忙しい。星は完全な光沢とともに輝いている。まだとても早い時刻である。赤さはただこのアウロラの顔の中に薄明るく輝いているだけだ、そしてポイボスはバトラー [Samuel Butler 1612-80] とともに語るならば、彼の火をもっと近くに動かさねばならないだろう、このウミザリガニを赤く煮るために。水の女神がワインを注ぐということは十分に滑稽である。その姿をポスターのためにワイン商人に勧めることができるだろう。それが水を注ぐ水の女神であるならば★。しかしここで歯の痛みを火酒でもって殺そうとしているそれはどのような生き物であるのか、そしてそれはどの性別であるのか。われわれはそのきわどい問題に最初に答える。それが女であることを見るためにはただちょっとした検査が必要なだけである。長い髪、目下のところまだぬぐってきれいにされていない美容ばんそうこう [ゴムを塗られた黒いタフタの絆創膏]、スカートポケットの後ろの腰の下の見誤ることのできない横幅、足とひざの形全体、誰もが古代から知っているひざの姿勢、それらはこれをほとんど疑いの余地のないものにしてている。人々はシャツの側面から抗弁した。しかしそのドレスは女性のものか。男の上着を着ている女は、カフスやひだ飾りが必要であるならばまたおそらく男のシャツも着る。例えばこの哀れな奴ら、彼らには見ることのできる礼儀作法のための空間がすでに欠けている - しかも見ることのできない礼儀作法のゆえに - のだが、彼らはこれまで聞いたことのないような種類のシャツ、 - 私は両性具有的な種類のシャツのことを言っている -、それを調達するべきなのだろうか。彼女の前、寝台の上に、彼女が身につけることになっている下履き

がある。すでに無駄な試みがなされたのではないかと私はほとんど心配するくらいだ。帯はまったく留め金から引き出されている、最大の大きさがまだ小さすぎたということのしるしのために、あるいはだれかが前もって最大の大きさを、当てにすることができる唯一の大きさとみなしたということのしるしのために。それは事実である、そして古代をまだ研究したことがない誰もがそれを知っている、そのかわいらしい女が腰の周りにごつい男の下ばきをはいていてもいつも窮屈であると感じるということ。それどころか、その下ばきを身に着けることは、一に対して百の割合で、テキストの中の暴力的な方向転換やダッシュなしにはまったく可能ではないことを。それは権力の象徴であるので、そして世帯においてはローマ帝国の都市の中の *fascis* [ファスケス、古代ローマの執政管の権威標章、一本の斧の周りに棒を束ねて縛り、「団結」を表す] のようなものを意味しているので、比喩的な意味における下ばきはもちろんまったく異なった事情にある。これらの下ばきを結婚した女性は結婚のあと数週間、まったく容易に身に着ける。そしてそれらは彼女たちに素晴らしく似合っている。 — 最初の問いについてはそれくらいにしておこう。さてその人物は何をそして誰を表わしているのか。アイルランド氏は、彼女はガニューメデス [ゼウスの奉杯者として天上にさらわれた美少年] として定められていると信じている。そして私は彼が正しいと思っている。彼のすぐ前にいるユピテルの鳥はおのずとそれを思い出させる、そしてガニューメデスの役割は正当に常に少女によって演じられることになっている。それは愉快であるが、しかしわれわれのすぐれた芸術家にとってはいくらか学術的すぎる。人々はガニューメデスの名前を通常は *γανύεν* と *μῆδος* から導き出すのだが、その最初の言葉は友好的な顔を見せるを、第二の言葉はおおおよそ忠告 [Rat] を意味している。さてしかしここでガニューメデスがしているよりももっと非友好的な顔は容易には作られない、そして彼が与えるよりもっと悪い忠告はなされない。本来彼は忠告を与えない、そうではなく逆にとてもよい忠告を受け取るのである。しかしホガースがそのようなものを考えていたということは可能であろう。一人の画家は、たとえ彼が本を読まなくても、押収しなくても、一度は神話学的な本を読むか、あるいは少なくとも調べる、彼が神話学に関係する一つの題目を取り扱うことを考えるならば。一つの逆さまの天が表されることになっているここではそれは特に必要である。しかし今その男がその事柄を本来は勉強したのではなく、ただ一つの辞書からさしあたり [pro tempore] 学び取ったならば、彼は知られているものの代わりにそれほど知られていないものをもっと容易に捕まえる。しかしこれはただ通りすがりに。

- ★ いわゆるビール標識、それはドイツの多くの地方、とりわけ田舎では、同時にワインが、少なくとも火酒が給仕される家の中にもぶら下がっているのだが、そのビール看板は水とワインの間のこの友好的な振る舞いを表現している。周知のごとく等辺三角形が角の上に置かれているのは水の記号

[▽]で、それに対して、それが辺の一つの上にあるならば、それは火の記号[△]である。この位置の中で結び付けられていると、それらはビールの看板を作る。パッコスを抱擁しているメンデルスゾーンのThetis [ギリシア神話、海のニンフ、水と海の擬人化] [メンデルスゾーンの論文「美術と学問の主要な根拠について」から。それはヴィンケルマンの「絵画と彫刻の中のギリシア芸術の模倣についての考えの解説」のエピソードを引用している]。

下の右手の角にガニュメデスを雲の上に連れていくことになっている鷲が座っている、彼は、彼の後ろのそのズボンをはいていない、いくらか重い患者 [Patient] がガニュメデスであるならば、不機嫌になるだろう。ここで雲が低く移動し、鷲の翼がそんなに強くても。しかし、鷲の翼の仲間になる背景の中の愛の翼と、ここに欠けていない一本の良いロープはすべてを克服する。梯子とロープ、そして愛の翼はどこに運んでいかないだろうか。鷲はここでさらにあのガニュメデスよりももっと軽い、心地よい荷を持っている、それがどの点においても最高に非友好的な助言者であるにもかかわらず。ここで鷲は、彼が厚紙のふた以上のものであれば、自分に食べ物として与えるものを一人の子供に食べ物として与えている、そしてそれは優れた効果を及ぼす。ここに対比されている頭のクローバの葉を微笑みなしに眺めることは不可能である。世話する女であれ、母であれ、女の眼の中に根気と母親らしいきちょうめんさ。鷲の眼の中には、分け前としてかゆではなく、子供を威嚇的に要求している様子。両者とも女中 - かたまりのひとつのみすぼらしい塊の上に張られている。その塊は猛禽と母の間の対比の暗い感情の中に生きてるように見える。鷲はここでかぎつめを持っていない、その代わりに女の足を。その違いはそれが見えるほど大きくはない。依然として捕獲足は残っている。少なくとも若いうさぎたちの運命はその交代によって少しも改善されない。

さていまわれわれはその作品の表題について何か有意義なことを言うことが必然的になっているところまでついに達した。これは俳優たちかそれとも女優たち [Komödiantinnen] か。ガニュメデスについてわれわれはすでに決定した。だからただアモル [恋愛の女神]、ユピテル、悪魔たちが残っている。悪魔たちはおそらく美しい性 [女性] ではない。しかしアモルは？ おお、それは確かに女性に属している。慣習は、愛の神はたいていは舞台上で少女によって演じられたというように昔から伝えられている、と私は思う。そしてそれはとても賢明な慣習である。少年がわれわれのところでは愛の神を演じるならば、(われわれのところではここでは、われわれの太陽の高さのところという意味である)、一般的に多すぎる意味がその役割の中に入るか、あるいは少しの意味も入らない。私はすでに見た、そして人々はその時、空っぽの人形劇と *amour à la Grenadière* [徒歩傭兵ふうの愛] の間で選ばねばならない。それに対して小女たちは普通その役割を完全に満たす。彼女たちは自然要件の中で

－ 自然要件の際に知はとても不必要なものである － 物質よりもずっと早い時期に形と知り合う、そして彼女たちはその時とても正しく、とても徹底しているの、大人になった娘は堅信の一年後にこれまでの欺く覆いをいま精神と真理の中に引き入れる [beziehen] こと以外に何も必要としない。少年は、本当に男の性であるならば、行為する前に常に知らねばならない、そして自分がすることを知らねばならない生き物はどのように愛を表現することができるか。また、と私は考えるべきだろう、この軍人のもとでは、単に装われた少年の勝利はますます確実で、全般的であるだろう。ここで彼は彼があるところのもので勝利する。そこでは彼が意味するもので勝利する。だからまたわれわれのアモルも少なくとも娘であるだろう。だからいますべての人物たち、女たち、ゼウスと悪魔たちに至るまで、そしてホガースの表題も証明されたも同然である。というのは、贖罪司祭と一組の若い誘惑者たちはまことに尼僧修道院を男性僧修道院にしないからだ。

これで結び目が解かれただろう。結び目はまたここではもっと容易にたたき切られている。服を着ている女優たち。本当に良いと人々は言うことができる、ここで服を着ている最中のすべての女たちは女優たちである。そのようにして表題全体は最後にとても普通のものに帰着するだろう。－ 一つの小さなタイトルに。人々が事柄 [Sachen] を与えるようなタイトルに。そしてそのタイトルに人物たちが与えられる － すべての種類の意図から。－ ここで意図はなにであったのだろうか。－ おお、私はあまりに長く些末なことについて話した。村のアクタイオン [入浴中のディアナを立ち聞きした伝説の人物。罰として鹿に変えられ、自分の犬にとらえられる] に尋ねなさい、彼はそれを確かに知っている。

続ける前に、一つの小さな観察を許されよ。私はたいそう決定的にここでガニュメデスの物語について話したのだが、それはただ意図して起こったのだ、もう一度問いのこの側面に対して、私が思うようにそのために言われるすべてを言うことを意図して。さらにまた幾人かの解釈者、そこにはニコルズも含まれているが、彼らは反対のことに賛成している。彼はその小さなセイレンの眼の中に単に医学的 - 外科医的な慰め以上のものを見る、すなわち愛を。そうであるならば、それはもちろん滑稽な眺めである、一人の愛人がそのような服装をして、彼の女性の愛人の前に立ち、歯の痛みについて嘆くのを見ることは。そしてアウロラ [あけぼのの女神] が集会の中でその娘に示している奉仕はその場面を一層高めている。それに対して、私に思われるように、たいていはよく推察する匿名の解説者はこれについてただいくつかの言葉を言っているだけだ、そしてそれらはまったく私の仮説に賛成している。私はちなみに何においても読者の判断を侵害しない。われわれの芸術家の不朽の作品を眺めることが与える喜びは、自然の作品の場合のように、そこにおいても行われる自分の力の訓練にかかっている。少なくとも、長年来、彼の作品における芸術家の気分や機知の中のまっ

たくまぎれもないものよりはむしろ、容易に誤解されるものと実際に誤解されたものが私を魅了してきた。探そうとする人は常に何かを見出すのだ。ひょっとしたら、自分で作品について注釈を書くことを彼に妨げたのは、この芸術家にとってとても有利な魅力であった。彼が自分の友人たちによって頻繁に要求されても、そして彼がそれをするを頻繁に約束しても。彼はそうすれば確かに失っただろう。何かを本当に深いとみなすためには、人はそれがどれくらい深いかをけっして知ってはならない。

夜の女神の右に、本当に冗談でなくいくらか暗いところに、すべての種類の気まぐれ [Mutwille] がぎっしりと詰め込まれている。イギリスの教会の説教壇において見られるような柔らかいクッションの上に (a pulpit-cushion) 一つのミトラ [司教冠] が休んでいる。他の場合にはその中に住むかもしれない聖書の格言や教理問答はなくなっている、その代わりに喜劇とファルス [笑劇] が、スズメがツバメのところに入居するように、そこに移り住んだ、そしておそらく最初の住民を引きずり出した。その隣にイギリスでは *dark lamtern* と呼ばれている種類の一つのランタンがある。回転ふたを持っているまぶしい [Blend] ランタンあるいは盲目 [Blind] ランタン。私はそれを上で夜の女神に与えた。それがしかしひょっとしたらミトラに属していないかどうか、そして光と闇の有益な混合をねらっていないかどうか、すべての時代にこの特許を受けた回転ふたをもった明かりから流れ出てくる混合をねらっていないかどうか、あるいはディオゲネスが彼のランタンをかつて司祭のもとに置かせなかったかどうか、私は知らない。その際すぐに夜は濃い霧を降ろした。それは暖かい髪雲 [Haarwolke かつら] の一つである、イギリスではその下で法の太陽が、それが勤務中であるならば、なみはずれた優美さとともに微笑むのだ。見ての通り、法 [Jus] はいまその中には住んでいない。ひょっとしたらそのかつらは猫たちの過渡的状态の巣である、それらの一匹の猫は帝国宝珠で、別の猫はリラで遊んでいる。 - だから、政治と文芸。 - 芸術と学問がそのように取り扱われるのを見ること、 - さいわいそれほとても稀というのではない - , それは不快ではない。小さな女流詩人は見てわかるようにつかみそこないをしている。リラの弦に触れる代わりに、単に共鳴ホルン [Resonanzhorn]* に前足で触れ、ひっかいている、そしてどんなに行儀良くその小さな経国策の女性 *Staatskünstlerin* は世界の政治にくち出していることか。両者は印刷機盤 [Buchdruckerstock] のもとに受け入れられるに値する。それでもって何かの新聞の中で、ある時は一つの詩にある時は一つの政治的な夢に検定証印 [Aiche: Eichstempel. それによって利用された尺度と重さの正しさが度量衡検定局によって証明される] を印刷するために。

* 私はこのリラが本来もともとは何であったのかが男女の詩人たちに知られているかどうか知らない。それは雄牛の頭蓋骨に他ならなかった、その空洞の角の間にヘルメスは四本の弦を張った。後

にこの楽器はギリシアとローマにおいてその最初の形からますます遠ざかり、そして詩的感動の象徴とデルポイの神の一番美しいアットリビュト [象徴的な添え物] となった。しかしその後すぐに、運命と流行の理解できない意志に従って徐々にその根源的な形に近づき始めた。そして今本当に再びドイツで雄牛の頭蓋骨の間に張られたように完全に響くリラが動くことになる。

まだそこに一本のロープが見られる。それは本来はロープ *Strang* (*the halter* 絞首索) である、そしてそれ故にそれは司法権の表象に近いのである。ドイツ人にとってこの説明はわざわざとらしく見えるかもしれないが、イギリスの普通の民衆にとっては世界で最も自然な説明である。ロンドンではキリスト教の他の場所よりもっと多くロープで結ばれ、包まれ、引っ張られるにもかかわらず、一本のいくらか短いロープは法的な意図の観念を呼び起こす。すなわち、われわれのところではほとんど絞首刑が見られないのだ。イギリスではそれは公的な催しもの [Circenss] に属している。さらにそこには手品術のためにあらゆる種類の道具が散らばっている。それはまた学部 - 家具であるのかどうか。ほとんどそうではないだろう。というのは、どうしてホガースは、そこで人がまただますということを知ることができたのだろうか。

ベッドのシーツの上の壊れた卵にいついてまだ一言。注釈者の一人は卵はそもそも、おそらくセイレンの声にそれを塗り、澄ませるためにそこにあると思っている。もし一つの不幸 (不幸な思い付きもそれに属している) があるならば、それは常に起こるに違いない。そのかわいそうな娘がまさに今ベッドの架台のところで泳いでいなければ、この思い付きは生まれてこなかっただろう。 - そうではない! それは明らかにこれらの人たちの不潔さ [Cochonnerie] をねらっている。その上に将来の食事への分担金 [Beitrag] が泳いでいるなんというベッドシーツだろうか、それへの分担金がベッドのシーツから手に入れられなければならないなんという食事だろうか。そもそもすべてが至るところにある一つの家政においてさらに区画が考えられることができるならば、この片隅にすべての状況から推測して、台所と食堂がなければならない。

アウロラ [あけぼのの女神] の後ろにクランクと栓をもった一組の海の波が見られる、それがふさわしいように、一つの海の波の凱旋門と別の波の太鼓、トランペットと先端の丸くなっているほうきの中の道具一式の中に静かに置かれて。もっとも厳密な理解における太平洋 [Mare pacificum: 平和な海]。ふだんは勤務中に水平である大波はここではほとんど垂直である。神々たちがその上でつまづかないように、あるいはすねがそれにぶつかって二つに割れないように。そして善良なおずおずとした家畜、卵を抱くめんどり、それはいつもならば、彼女のままだ娘の一羽、小カモが水たまりに落ちただけでたいそう不安げに泣くのだが、それがここでは、カモメの平静さでもって、彼女の本物の子供が大波が轟音をたてる海の波

から波へよじ登るのを見ている、まるでそれが普通のニワトリ梯子であるかのように。上の屋根の下に竜がつながれた一台の馬車が見える、そのうちの一つの竜はわれわれのアクタイオンをシュシュと音を立て押し返えそうとしているように見える。一つの側に旗と連隊旗、新旧の英国とローマの旗、それは全体に王冠をかぶらせる銘文を持っている、

SENATVS POPVLVSQVE ROMANVS

ローマの人民と元老院 [ローマの国家は元老院と人民の共同作業に基づいていることを表現している]

他にまだそこに散らばって立っていたり横たわっているものは、足場の台、画家あるいは桶屋 [ペンキ屋] の物、刷毛絵筆から出来上がったばかりの田舎の場面、それはとても納得のいくものである。しかしまだ二つの品目がわれわれの注目に値する、竜の馬車とその上に、わらの束の後ろにはまっている二人の人物である、すでに盗まれた家具のように、あるいはこれから互いに盗もうとしている二つの心のように。竜の車についてアイルランド氏はそれはメデア [Meda. コルキスの王の娘、イアソンを助けて金羊毛皮を得させるが、追い出されて、彼女の子供たちを殺した] の馬車であると思っている。今もちろんそれは何かのために利用されなければならない、しかしなぜそれは上にあるのだろうか。下には場所がないからと答えることはできない、というのは、たとえ下にその竜の馬車のための場所がなかったにしても、一つの滑稽な思い付きのために十分場所があったからだ。そしてその思い付きは確かにその後ろに潜んでいるのだ。竜が火を噴くならば (そしてそれをすべての竜がすることになっている、とりわけ村で、あるいは小さな町で、そしていくつかの大きな町で、当然に [von Rechts wegen], すでにそれだけのためにホガースはわらと屋根のそんなに近くに竜をつかんで置くことができただろう。しかし竜は冷たくシュシュと音を出している。それが再びあまりに学者ふうでないならば、私はそれはケレス [豊穡の女神] あるいは彼女のトリプトレモス [エレウシスの王、ケレスと彼女のギリシアの姉妹デメテルの愛人] の馬車と思うだろう。それは周知のように竜によって引かれていた。私は始めのところですぐにこの納屋をまったく無意識的にケレスの聖域と呼んだ。その表現はとても平凡である。だからケレスがたいそう多くのもっと高い神々の到着の際に降りなければならなかったそして屋根の小部屋を選ばなければならなかったとすればどうであろうか、*神々* [王や見本の出版者、書籍販売者] が到着するならば、ライブチヒ見本市の幾人かの人々のように。穀類と [打穀用] からざおは排除されなければならなかった、そしてその上にそれらは実際に一緒にある。しかしそれは彼女のトリプトレモスの竜の翼をもったケレスではないのか。しかしもう十分だ。ひょっとしたら読者のもっと良いことを見出すだろう。

わらと旗の後ろの恋する二人はイオカステと一緒に哀れな哀れなオイディプスである。そ

れはその上方に書かれている。容易には一人の人間を凌駕することがないトラスラー Trusler はここで少なくとも今までの自分自身を凌駕した。彼はホガスはここでこれらの女優たちの近親相姦的な生を暗示したと思っている。それはなんとという思い付きだろうか！ホガスをただ全体から知っている人に彼の感情は次のことを教えるだろう、ホガスは無垢な微笑みにとって完全に神聖なものとしてされている一つの作品の中で一つの考えとともに姿を現すことはできなかった、突然にそれが含んでいる忌まわしいことによってすべての印象を不快にするだろう考えとともに。これらの人たちが近親相姦者 [Blutschänder: 血を汚す人] であるならば、彼らについて笑う人間は一人もいない、彼らを嫌悪するだけだ。彼らはおそらく、われわれが見たように血を流す人 [Blutvergießer] だろう、しかしとても罪のない血を流す人。彼らはおそらく罪びとであるかもしれないが、しかしおそらくとても濃厚な、哀れな罪びと。その事柄は次のような事情である、そこに挟まっているものは、リー Lec [Nathanael Lec は Dryden とともに悲劇「オイディプス」を書いた] のオイディプスのための装飾品である。ニコルズ氏はこの悲劇の第二幕で舞台芸術家のために次の指図があることを注釈している、人物たちの頭を囲んでいる雲がそびえたつ、人物たちの頭の上に王冠が姿をあらわす、そして上、向こうのほうに大きな金色の文字で名前が輝く、OEDIPVS と JOCASTA。この場面は空間の不足からその後ろに投げ出された。しかしホガスはまったく何も行き当たりばったりにするのではないので、そして彼が投げ捨てているように見えるものをつねに意図をもって投げ捨てるので、彼はもちろんいくらか悪ふざけ的に、その二人の小さな人たちをそこに潜り込ませたのである。まるで彼らが恥じているかのように。

この納屋の中にさまざまな衣服がひるがえっているのを見ると、ここに吹いている歯の痛み空気と鼻かぜ空気の方向が容易に書き留められる。風はバラ色の凱旋門の隣の開口部に入り口を持っているように見える。それはガニュメデスの歯の痛みの方に小さな寄り道をした後で、アウロラの衣服の中で朝の空気になる。そして明るい日の光の中でいくらか悪ふざけ的に汚れない女神と戯れる。そして上で別れて二つの流れとなる、その左の流れはユノの衣服と胸を仰いでいる、そしてこの側からあいている方を探している。それに対して右の方の風は通り過ぎるときにいくらか洗濯物を乾燥させ、上で屋根の方に退却する。

われわれが今この版画を観察 [beschauen] した後で、もう一度一瞬、それに耳を傾ける [behorchen] ことは役に立たないことではない。その時いわば秩序と調和の新しい世界が開かれる。風のざわめきとアレクサンダーの兜の中のさらさらという音、それは無視されているが、それらがここで耳の中に入ってくる。ユノの気取った五脚抑揚格の無韻詩はディアナのそれと同時に苦しんでいる猫の歌声と猫を抱いている女性歌手たちの歌声によって支えられている。それから一組の湿った長靴下の上で雷神の運命の命令、祭壇 [Ara] のところの

悪魔の呪われよ *damm ye* と調和する(悪魔のためのこの代名詞が一つの呪いであるならば)。そして最後に歯の痛みのためめそめそ泣くこと、それは再び鷺が穀物粉かゆの餌を与えている小さなナイチンゲールの響きと関連している。ここに床板を張られた床があるならば、私は、帝国宝珠を転がしている小さな元気なお気に入り女を思い出させるだろう。お気に入り小猫が統治の表章で遊ぶならば、それは眼や耳にとってとても不快な事柄である。

眼と耳にとってはそれくらい。第三の感覚をわれわれは静かにさせておきたい。残念ながら！ ホガースは一度以上もその感覚の休息のために配慮した。おそらく彼はまた同時に、われわれとは別の情緒や美術のいくらか別の定義を持っている人間たちの階級の情緒の楽しみを配慮しようとした。この版画でさえ気まぐれから、あるいは本来はこの不作法から自由ではない。私は私の検閲係を恐れる。そしてそれ故に沈黙する。読者はいずれにしてもその際に何も失わない。それは単に一つの小さな島[もしリヒテンベルクが明らかにいっばいのおまるのことを言っているのであれば、彼がどのような細部を暗示しているのかは、不明である]に関連している、そしてその島は、害なく未知の国でとどまるかもしれない、果てしなくもっと大きい世界の別のいくつかの島のように。

この版画のオリジナルの絵画は現在リトルトンの Wood 氏の所有である、彼はそのために26ギニー以上は払わなかった。[1738年のオリジナル絵画は1874年に焼失した]リーペンハウゼン氏は今度ホガースの複製を描き直ししなかった、それは、私には思われるのだが、とても多くの正しさとともに。というのは、第一に、それがふさわしいように、光は右手から入ってくる。第二に、猫のわきの老いた女は右手で切る、そして第三に、夜の女王は右手で縫う。ホガースがその老いた女の場合にはさみを彼女の左手に与えることを意図したと人々が仮定しようと思ったならば、彼はしかし、そんなに凡庸な思い付きを一つの同じ版画の上で二度も利用することができた男ではなかった。そして第四に、ガニユメダスのボタン穴も再び左側に来る。上着は裏返されていると人々が言いたいならば、親愛なる天よ！何というナンセンスがそのような解釈学によって正当化されるだろうか！

良識 *Bonsens* はこれらのすべてのこせこせした部分的仮説を突然に飲み込む。そして言う、ホガースは彼の複製を描きなおす苦勞をしなかった。だから彼の絵のいくつかにおいては、剣を右手にぶら下げている人物が現れる[例えば、第三の版画「放蕩者の道」、第五の版画「当世ふうの結婚」]。しかしもちろんわれわれは注意しなければならない、というのは、ホガースはいくつかを描き直した、あるいはそれらは決して絵画ではなかった、そのようにこの冊子の第二の版画も同じような事情にある[「真夜中のおしゃべり」]のことが言われている。「『ポンチ酒のパーティ』は素晴らしい出来栄だが、それはリーペンハウゼンによって署名された、そこではほかの場合には右に来ただろう剣がある」とリヒテンベルクはエッセンプル

クに書いた。1794年4月12日]。そこにオリジナルでは剣を左手に持っている一人の男が座っている、これは描き直されなければならなかった、彼はまた時おり彼の特別な意図を持つ。例えば、彼の怠け者と勤勉な男において一人の男が法廷の前で宣誓をするが、その際に左手を聖書の上に置く。これは意図である。というのは、そのすぐ後に裁判所職員は右手で書くから。

真夜中の現代的な会話 Midnight modern conversation

社交的な真夜中の談話

最新の趣味とともに

あるいは

ポンチ酒パーティ

[[ポンチ酒パーティ]の60から70の最良の複製の上に Conversation の代わりに Conuersation と書かれている。ホガース自身が Conuersation と記しているにもかかわらず、私はそれを変えさせた。だから u を持った複製は v を持った複製よりも未決定的に in dubio もっと良い」とリヒテンベルクはエッシェンブルクに書いている。1794年5月29日]

かなりの程度の才気のなさにまで飲んで落ちてしまった、ある社交会の才気あふれる描写は、イギリスと同様にドイツにおいてもわれわれの芸術家のもっともよく知られた作品の一つである。私自身はそのオリジナルに、いつもならばそのような作品が容易には行きつかないような場所で出会った、そして夜の銅版画はとても多い。これらの中には一つの詩、バックスの従者たち *The Bacchanalians* [Richard Ames の詩 1693年] あるいは真夜中 *Midnight* という詩を持つ、できればのよい縮小された銅版画がある。その詩はホガース氏におそらく彼の許可とともに捧げられている。またある詩人ジョン・バンクス John Banks [1709-1751] は、この版画の一つの縮小された複製を彼の鉛のような詩の一つに浮き袋として結び付けた。それを時代の流れの中で沈まないようにさせるために。そして彼は自分の最終目的に達したのだ。その複製は詩の一卷全体を航行可能にしたそうだ。この頃またこの銅版画の表題をもったパンフレットが現れた。そしてこの銅版画の内容はまさにこのタイトルで芝居にされた、少なくとも一つの場面として。最後にいくつかのグループが実物大の蠟人形として表され、世界中に巡回したということが知られている。

この観念にとても多くの入口を与えているものは、おそらくその作品の中の大きなわかりやすさであろう。少なくとも全体において。自分の地位をいくらか忘れること、そして酔いによって野獣の方へいくつかの段階を降りること、あるいは動物たちに自分の上の方に幾段が昇ることを許すこと、それはつまり人間の普遍的な本性である。それが、創造の名作に気に入る時点で描かれている。これよりももっと入り混じったふうには女性のいないパーティは容易には考えられないだろう、ここには明瞭にすべての四学部〔神学、法学、医学、哲学〕のメンバーが見出される、それだけではなく生産階級や軍人階級もここに自分の代表を持っている。それから一人の奴〔Patron〕が侵入してきた、彼については彼がだれなのか人々はよく知らない、匿名の風刺文書の作者、反乱の説教者、へぼ詩人、あるいは悪党か。ひょっとしたら袋〔Beutel 財布〕と時の必要条件に従って、これら四者のすべて。ここには酔いの多様な作用が見出される、さまざまな等級に従って、名人的に表現されて、徹夜の祈りを今なおいくらかの思慮深さとともにしている聖職者から戦場にとどまっている士官まで。ここにはまだ口論する人と自由主義者が欠けているだけだ。彼らが世界全体を殺害するか酒を注いだり〔beschenken〕しないように、ナイフや短剣、あるいは財布が取り上げられなければならない人間たち。このすべては誇張なく実行されている。そしてそこにホガースの作品の持続性の主要な理由があるのだ。そしてひょっとしたら、持続するすべての芸術作品の。本来的なカリカチュアの短い生は一般的に党派の熱意のおかげである、あるいはそれらに長い生が与えられるならば、悪趣味のおかげである。カリカチュアの守護聖人であった党派の熱意とともにホガースの真のカリカチュアは死んだ、そしてまだ残っているわずかの物はただ単に悪趣味のわずかの保護のもとに生きている。

時計はここでは4時を指している、明るい陽がすでに瓶、グラスと眼の中に反射している、少なくとも11組の眼の中の一組の眼の中に。朝の四時である、— 太陽に従えば。その版画を見る誰もがそう考えなければならない、しかしホガースはたしかに他のことを考えた。もちろんここでは実際に真夜中である、そして少しの人たちはこれから座ろうとしているところだ。あちこちでは横たわろうとしている。朝まで、そしてそれでもってまだ四から五時間の時がある。これは関連している。イギリスでは、そのもとに特にロンドンが理解されるのだが、世界中でのように、夏時間がある、夏時間に従って時計は調整される。その他に、それとはとても異なっている一つの別の時間がある、それは原初的な時間〔Urzeit〕と呼ばれることができるだろう、そしてその原初的な時間に従って人間は方向を与えられるのだ。原初的な時間に従って少くない仕事が人間によって片づけられる、特にテーブルとベッドが問題になるすべての仕事が。これらのものと人々は結び付く、そしてこれらのものから人々は別れる、ただ原初的な時間の時刻に従って。この銅版画が現れた1735年に〔実際にはその銅

版画も絵画もすでに 1733 年に現れた] 真実の太陽は原初的時間の太陽よりも四時間早く進んでいたとホガースは言いたいのだ。夕方の四時は正午だった、そしてだから朝の四時は真夜中だった。しかしあの時以来、両方の太陽はお互いからとても遠くまで離れた。いわゆる大きな朝食が今、本当の正午を超えていく、大きな昼食が夜の中に入っていきように。しかし時々、自分の仕事の際にまだ良い時を維持している人間たちがなおも存在しているので、それによって時おり奇妙はコントラストが生まれる。次のエピソードは私に一人の友人によって保証された、彼はその物語が起こったときにロンドンにいたのだ。現在の大臣、ピット [William Pitt 1759-1806]、真の時と健全な理性の古いスタイルの偉大な崇拜者は、その古いスタイルを維持することが一人の大臣にとって可能であったところで、D ☆☆公爵夫人 [Dorset 侯爵夫人] によってある晩、真の時間の十時に昼食 [Mittagessen] (dinner) に招待された。大臣は、彼がその招待を訪問することができない、彼は同じ日の九時にすでにある夕食 [Abendessen] (supper) への招待に同意したのと言って断った。そのようなものは当たると。このような打撃 [Hieb] をチャールズ・ジェームズ・フォックス Chales James Fox [1749-1806 政治家] とリチャード・B・シェリダン Richard Brinsley Sheridan [1751-1810 劇作家] の一つにまとめられた機知でも防ぐことはむつかしかっただろう。ここで仕事を支配している時についてはこれくらいに。その空間の中の代理公使と仕事についていくらか。

最初に目に入ってくること、世俗的なラテン語の下の粗野な黒いヘブライ語 - それはデイド [Didot, フランスの印刷業者、活字のポイントを定めた] の活字鑄造所の活字 [Bleicher] で印刷されている - のように、それは教師、おそらく律法学者よりはむしろパリサイ派の人 [偽善者] である。彼がこの真夜中の宴会に彼の法衣 (cassock, 司祭平服) を着て現れるのを恐れないことによって。一方で彼は今、早朝説教のために、人々がそう言うように、出来上がっている。 - ホガースがこの男の身分をここにおいてさえ寛大に扱っているのを見ることは不愉快ではない [リヒテンベルクが 1786 年のポケットカレンダーでの解説に対して本質的により慎重により穏やかに、酔った聖職者のホガースの肖像画を書き改めていることは示唆するところが多い]。不器用な人は確かにもっと愉快なものを供給しただろう。それはずっと容易でもっと軽蔑すべきことだ。ここはそれ以上である。私は古代のいかなる芸術作品も思い出すことはできないだろう、そこにおいて荘厳さとまじめさが、両者と完全に結合されないように見える状況と組み合わせられて、例えばユピテルの頭の中のように完全に損失なく表現されている古代の芸術作品を思い出すことはできないだろう。ユピテルの頭の中では、彼は一つの切断された石の上でエウロペの愛人として表されている。酔ったことを恥じない教皇も大司教もこの選び抜かれた男のように酔っていることを恥じてはならないだろう。どのような尊厳とともに彼はかき混ぜ、すくい、混ぜそじてたばこを吸っ

てないだろうか！ おお！ 人々が表情や身体にそもそも毎日毎日数時間、尊厳と礼儀を保つことを強いるならば、一方精神が反対のことを策謀しているか、あるいは用意している状態ではないとき、それは役に立つのだ。表情や身体は最後には勤務を一人で果たすことを学ぶ。よく調教された竜騎兵馬が、彼らの騎手がとっくに後ろの溝の中に横たわっているときに、方向転換に参加するように。

この版画の上のたいていの頭部は肖像画であると一般的に主張される。そして私はそれを信じる、ホガースは明確に、それは本当ではないと言っているので[★]。とにかくすべての中でただ三つの肖像の意味だけが保存された、そしてこれらでさえも、時のそのような中間空間の後では訂正されないいくらかのあいまいさとともに。とりわけホガースがそのあいまいさを可能な限り長く維持することを試みたであろうので。

- ★ あるいはオリジナルの下にある詩句によって言われるので。しかしその詩句は、われわれが気づかねばならないように、公表の後しばらくして、解釈が彼を不愉快にさせ始めたときに、彫り付けられたものだ。最初の二行は以下のようだ、

「ここで意味された類似点を見出すと思うな
われわれは悪 *Vices* を鞭打つ、しかし人物を容赦する」(英語)

この頭部との類似性を二人の人物が要求している、牧師のフォード Ford [Cornelius (Parson) Ford 1694-1731] とヘンリー Henley という名前の人 [John Henley 1692-1756]、ふだんはただ演説者ヘンリー [Orator Henley] と呼ばれる人。前者はいくらかのあいだ、ハーグのイギリス大使としてのチェスターフィールド卿 [Philipp Dormer Stanhope 1694-1773] のもとで私的聖職者 [Capellan] であった。彼はジョンソン博士^{★★}の知人で親戚であったが、そのジョンソン博士 [Samuel Johnson 1709-1784] は彼について大きな才能を持っているが、非難すべき礼儀打法の男として話している。彼は一つの有名な家政の規則を良い評判の経済に応用した、すなわち多くのもので家事を管理する、わずかのもので間に合わせる。ジョンソン博士の伝記 [1787年] の有名な著者のサー・ジョン・ホーキンス [Sir John Hawkins] によれば、それはいわゆる弁士のヘンリー [Henley] である、当時有名なとても人気のあった説教者。それは一種のザックマン [Jobst Sackmann 1643-1718, 牧師] であった。低級なほとんど下層民的な言語でまさに必ずしも悪いわけではない物事を言い、そして多くの喝さいを見出した人。サー・ジョンの言明は、われわれがこのヘンリーについて持っている肖像画によって支持される。その肖像画の中で彼は子供に洗礼を施しているところを表されている、そして明らかに同じ顔で。しかしそれはここではわれわれにほとんど関係がない。ただし、正規の法衣を着てさらに朝の四時にポンチ酒の中で舟をこいでいる牧師がイギリスで二つの類似性を見出したということは奇妙である。その人の顔がほとんど覆われておらず、それがむしろいっぱい光の中でいわばダイヤモンドリングの中のとてもすばらしい水の中心

の宝石 [Mittelstein] として、テーブルの周りに現れるにもかかわらず、それどころか、その指輪の本来の栄光自体であるにもかかわらず。そのようなことは少なくとも、その顔が覆われていたならば、小さな競争者の雑踏も生まれなかつたらうということ为前提としている。

- ★★ ボズウェル [James Boswell 1740-95] のジョンソン伝 第二巻 263 頁、このページでは、フォードがここに登場した語っている男であることは決定されたとして仮定されている。さらに彼が死後ある料理店の給仕の前に二度現れたということは、決定されたこととして仮定されていない。ジョンソンがフォードの性格を表している言葉は、それは他の場合には正直なたえず教会もうでをする人にふさわしいにもかかわらず、完全に以下のものである。「私は彼は偉大な素質の男 [great parts] であるが、とても浪費的であると言われた。しかし私は彼が神を恐れない人間 [impious] であつたとは決して聞かなかつた」(英語) それはしかし、とりわけ一人の牧師について使用されると、ほとんど以下のように聞こえる、私は、彼はなるほど狼であつたと聞いたが、しかし、彼は羊の衣装あるいは羊飼いの衣装で歩きまわつたと決して聞かなかつたと。

最初に右に(目下のところ)側面の [a latere] 前歌手 [Vorsänger] と前の飲む人 [Vortrinker] が立っている。この状況の下では一種の教会の用務員。彼は彼自身のかつらを取り去り、それでもって彼の威厳のある上部頭部に冠をかぶせている。二つの頭部のための空間はおそらく二重の主教の帽子 (mitre) を狙っている。だから唱えられた健康を祈る言葉は、牧師殿のために聞近いうちに司教区を！ を意味しているだろう。この人の隣に明らかにイギリスのいかさま弁護士 [marchand de Droit] が座っている。二種類の法 [Jus utrumque, 聖職者的な(教会法上の法)と世俗的な(ローマ的な)法], 少なくとも正と不正はまだ二つの眼の中から薄明るく光っている。またかつらは、ただ一重のものが座ることができるのと同じようにとても二重に、とても別々に座っている。しかし左側は右の側 [Rechts-Seite] であるように見える、右側を指で覆うならば見出されるだろうように。一つの手には彼は容器を持っている、そして別の手にポンチ酒のグラスを。しかしビュリダンのロバ [Buridan。等距離のところには等量の干し草を置けばロバが迷って餓死する。優柔不断な人] はここで右側に合わせられているように見える。少なくとも、まるで彼の静止している微笑みが右側の彼の隣人の語りにいくらか関連を持っているかのように見えるが、その隣人はひょっとしたら、その際に何かを稼ぐことができる一つの事柄を報告している。しかし彼はもう考えていない、あるいは彼が考えているならば、それは、脚がとつくに切断された人たちがまだ足指を感じるかのようだ。この肖像画にも、十分に滑稽だが、二人の人物が名乗り出た。そのような国では少なくとも風刺を描くことは良い。一人は若い時の、後の大法官ノーシントン Northington 卿 [Robert Henley Lord Nothington 1708-1772] である、もう一人はカトルビー Kettleby, 有名な弁護士、管財人 [Prokurator], ロンドンの裁判所 [Gerichtsschranke] の

出しゃばりの不平家 [Schreier] である。前者はしかし彼の要求を取り下げた、そして後者は妨げられない所有権を持つに至った、そして望むならば、彼の肖像画に額を作らせることができた。この二重なことの評判は有名性まで上昇した、そしてそれゆえにまた Causidicade (the Causidicade) [causideical: 訴訟申し立ての]、かつてとても読まれた風刺の中で重要でなくはない役割を演じた。それはおそらくウィーン [皇帝の裁判権] あるいはヴェツラー [Wetzlar 帝国最高法院の所在地] で一つのドイツ的な改作あるいはゲルマニア [印刷場所の申告に権限を持っていた] とアルトナ [Altona. デンマークの都市。出版の自由があった] での印刷に値するだろう。

これは二つの学部であった。今われわれはテーブルの周囲を少し跳躍して位階に従えば第三の学部に至る。

この学部はここでは前景で椅子の背もたれに掛かっている、あるいは漂っている、あるいは歩いている、あるいは立っている存在 - どれなのか正しくはわからないが - その存在によって表されている。彼はおそらく揺れているボートの中に立っていると思っている。一方で彼の隣の人は彼の前で幸福に硬い大地 [Terra firma] の上に上陸した。それが医者であることをすべての解釈者は一致して証言している。そしてこの人の下にかつらの中の二つの結び目。そのうちの一つの結び目はまだ自分の尊厳を主張している、別の結び目はほどけてしまった、そして髪は胸からぶら下がっている。これら二つの結び目が医学の二つの部門、医学 [Medizin] と外科学を意味しているならば、私が一度聞いたように、おそらくほどかれた結び目は医学 [Medizin] である。というのは、この人間においてはまだなにかが持ちこたえることはむづかしいのだが、外科学は彼のもとで今なおかなり持ちこたえているから。彼はすなわち、彼が挫傷をかぎつけるところで、すぐに注がねばならないという本能から、彼の前に倒れた士官の禿げた頭の上に Schußwein [グリムの辞書によれば意味は不明。税 Abgabe として引き渡されるワイン (?)] の瓶を注ぐのだ。その手段はそれが指示されている場所には達しないが、しかしこのことはその表現の真理からなにも取り去らない。葉の大部分は注文されるよりももっと正しくあて名を書かれるのだ。葉が通り過ぎなければならない路上で、最初の駅を差し引くならば、部署 [Posten] は人々が望むようには整えられていない。私はそこの戦場に横たわっている男 (Momento mori 「お前が死ぬであろうことを思え」ではなく、単なる Hic jacet 「ここに横たわっている」) を士官と呼んだ、そして彼はまたそうである、戦場のゆえにではなく、彼が明らかに帽子の上に持っている帽章のゆえに。イギリスにおいて帽章は常に士官を表している、上着の色が望むものがなものであれ、黒あるいは緑であれ、その裁ち方仕立てが奇妙であれ、例えばここで上着の折り返しがかつて私の地方 [ダルムシュタットの事] ではローマの [暦の] 月 [Römer Monate. 帝国等族の旧帝国議

会を構成する諸身分の皇帝への経済的な分担金]と呼ばれていた種類のものであれ。それ故に数年前に、当時われわれの大学で帽章がまだほとんどすべての学生によって身につけられていたのだが、一人の旅行中のイギリス人が到着の数時間後に私を訪問したとき、彼は彼の戸惑いと、ここではこんなに多くの若い士官が勉強しているということについての喜びを表明した。彼は本当に、彼の観察に基づいて、おそらくはイギリスの軍隊の不利益という結果になるだろう一つの省察をするところであった。その時、私は彼の話をついで、言った、彼はなるほど全体においては間違っていない、ここでは多くの士官たちが大学で勉強している、ひょっとしたら何かの国よりもっと多くの士官が、しかしおそらく帽章が士官でない多くの人を士官とみなすように彼を誘ったのだろう、と。ロンドンではだから帽章とともに横たわることができる、そしてそのような帽章はそれを身に着けている者の身に遅かれ早かれ罵倒を招くだろう。彼が嘘をついて入ろうとする身分からと同様に、彼が嘘をついて出ようとする身分からの罵倒を★。この転倒の際にその敗れた男から帽子とかつら(?)が落下する、そしていくつかの功績のためにガラガラなるもの [Schnarren pour le meritie。フリードリヒ二世が1740年に創設し、ただ彼の軍隊の士官のために敵を前にしての功績のために規定した勲章。Orden pour le meritie] がその美容ばんそうこうとともに姿をあらわす。その美容ばんそうこうをこの半分の給料で雇われた [auf Sold setzen] 主人公はおそらく不名誉の似たようなベッドから持ってきたのかもしれない。両者、医者と士官がいま自分の職業についてほとんど知らないにしても、彼らがここでしているあるいは耐えている最後のものの中には職業の何かがある。士官は転び、外科医は香油を塗っている。前者は握りこぶしに正しくない銃を持ち、後者は正しくない瓶を持って。彼らは選択を誤った、退去するまえに、士官は急いで彼の椅子の背もたれでもって目に見えない川の上に橋を架けた、その川を瓶とポンチグラスの金持ちの女相続人、川の女神のクロアキーナ [Cloacina] が彼女の壺の中から注いで作ったのだ。その流れは本当に主要川床 [Hauptbett] をかなり超えている。残りのものをローマの [曆の] 月 [Römer Monate] がふき取るだろう。士官が彼の脚をまだいづらか伸ばすならば、彼は政治を足で踏みつけるだろう。その政治の威厳のある代表者がここに座っている。休息を楽しんでいる、そして楽しませる頭部。すべてはこの政治家の顔つきの中でとても静かであり、すべてはとても信頼のおけるものだ。彼は自分の事柄をとっても確信している、— しかし彼がしていることは役に立たない。彼は自分の頭の中でパイプに火をつける計画を形成した、そしてそれで口に火をつけた、それはすぐにスカーフに火をつけるだろう、そしてそれからスカーフは近くにある大きなかつら [Haarmagazin] に火をつけるだろう。それどころか彼は瞑想の中で右手の袖口を、パイプに点火すべきろうそくとみなしているように見える。それはなんという政治であろうか、なんという良い考えの実行であ

ろうか！ 彼のポケットからは二部の、対立している党派の政治雑誌がのぞいている、ロンドンジャーナル [London Gazetteらしい] とザ・クラフツマン [Craftsman。Walpoleに反対する党派の雑誌]。ここでは少なくとも結びつけられて。それらは意味深長に士官には欠けている剣の上にある。

- ★ おそらくそれは、次のような素晴らしい物語の中の罵倒が該当した嘘つき女である。イギリスの裁判官の大きな特権は知られている。彼らが法の解釈者と話し手として裁判の中に座っているときに。ある裁判官は、職の遂行の際に彼を厳しく非難したプリンス・オブ・ウェールズ、後のヘンリー五世をすぐに逮捕させた。そして短気だがすぐれた王子の大きな名誉であるが、王子自身がこの書類をととも正当と認め、その裁判官に許しを請うた。数年前に次のことが起こった。ある兵隊にととも似ているように見えた一人の人間が Old Bailey の気まずい思いをさせられる法廷でベンチに座った。そのベンチは本来、彼がそうであったような傍聴人にはふさわしくない席だった。それに気づいた裁判官はだから裁判従者にまったく親しげに、しかしいくらか大きな声で言った、「*そこの兵士に言いなさい、彼に別の席に座っていただきたいと*」。それによってこの紳士は侮辱されたように感じた、そして激高し、言った、*私は兵士ではない、私は士官だ*。そして帽章を示した。今、裁判官は平静さを少しも失うことなく、まったく大きな声で、命令的に裁判従者に言った。「*聞きなさい、兵士ではないその士官を追い出せ*」。

武装した政治の右側に髪袋と宝石をつけた一人の老いためかし屋 [Zeit-Affe: 時の猿] (coxcomb) が座っている。彼は外国人であるように見える。それがドイツ人であることは困難だろう。ドイツ人は教会にととも近く、教会とともっと良い関係にあるだろう。彼がここで歌おうとしているものがレクイエムではなくただ例えば四か五幕の小作品であるということがなければ。だから彼はおそらく再び合唱の中に現れるだろう。いわゆる大きな二倍のほろ酔い状態 [Hieb] がある人間に、もし彼がある年齢にあるならば、きれいに見えるもの！ テーブルの上の彼の隣のワインによって麻痺した手は、口がまだ言葉を探しているもの、しかしおそらくすぐに見出すであろうものを話しさえている。その状態に長くとどまることは不可能だろう。そのような台つきの両手つば [Krater] は何かの新しい革命なしには閉じられない。私は政治が二つの火の間に来ることを恐れる。今まさに太陽が、日の光が照らした。朝の供物の煙の柱が聖人の方に上昇する。しかしまるでその聖人のもっとも繊細なもの、それ故に目に見えないものは右にいくらか移動し、火山の中の激昂を速めたかのように見える。私は告白しなければならない、このしゃれ男がととも表現豊かに描かれていようとも、まさしくその表現豊かな男にとって都合の悪いことなのだが、そのために彼が昨日おそらくおめかししなかったかもしれないその性が今彼に飽き飽きしているように見える。われわれはだから彼を自然にゆだねたい。そしてもっと好ましい対象に向かいたい、私が言うのは、テーブルの反対側の美しい羊飼いのことだ。ここでしゃれ男のもとでは恐れられた伝達は少なくとも害にならない。そのしゃれ男の口はいくらかあくびをしている人たちの家族の中を

見ているのだ。

この素晴らしい主題の観察の際に、*ポイベ* [月の女神]ではなく*ポイボス* [太陽]が彼の顔と下ばきを照らしているにもかかわらず、*エンデュミオン* [羊飼いの美少年で、月の女神に恋をされる]を考えないことは不可能であると思う。彼はなんと美しくそこに座り、横たわっていることか！ かつらを椅子の上に、頭をかつらの上にささえて！ 彼がいびきをかくのを聞かなければ、人々は彼がいびきをかいているのを見るに違いないと私は思う。そのような鼻、おそらく半透明のホルン、本当のクラリネットの曲、それは優しい息の変化の際に無関心でとどまるのは不可能である。鼻は震えなければならない。自然の永遠の法則に反対しては何も起こらない。その男はどんなに幸福ではないだろうか！ 羊飼いの服を着た狼を見ない、ポンチ酒さじの [オールのような] ひと漕ぎを聞かない、戦士の倒れる音も、橋のがたがたいう音も聞かない、自分の計画でやけどをしている経国策の失策も聞かない。時の伝説 [Sagen der Zeit]*はもう彼をわずらわせない。彼はまたテーブルへのほんの少しの打撃が彼の悪い形でバランスをとられたポンチ酒を外から彼のズボンの中に注ぐだろうということを知らないし、予感していない。この幸福な男についてマイボルン [Heinrich Meibom 1638-1700] の素晴らしい詩句に言及しないことは私には不可能である。その詩句でもって私はしばしば自分を寝かしつけた。読者もその際に眠り込む。よし！ 今度は少なくとも読者の眠りは作家に敬意を表するだろう。婦人方はそれをだれかに眠り込む前に翻訳してもらおうだろう。

軽快な眠りよ、お前は死の明瞭な模写である。しかし私はお前をただ寝台の仲間として願う。愛らしい休息、私はお前が来ることを願う、というのは、生なしに生きること、死なしに死ぬことはなんと心地よいことだろうか。[ラテン語]

Somme levis, (quanquam certissima mortis imago) ;

Consortem cupio te tamen esse tori :

Alma quies optata veni, nam sic sine vita

Vivere quam suave est, sic sine morte mori.

おやすみ。

* 新聞のこと。

さらに続きへ。この燃え尽きた薫香ろうそくから左に。ちょうど時計の前で、ホガースはろうそくをさらに二つ置いた、まだ燃えているろうそく、だから言葉の一つ以上の意味においてまだ煙を出しているろうそくを。そのグループは本当に、描写されるよりももっとよくもっと容易に感じられる何かを持っている。一人の男は自分の顔を世界からそらした、そして境界線に向かって煙を出している。もう一人の男はいくらか閉ざされた視線で、時の中を

見ている。彼らは背中を互いに当てて座っている、一人はもう一人の椅子の背もたれである。世界絵地図 [Orbis pictus。Comenius の作品 1658 年か、リヒテンベルクの同名のノートか?] の将来の版の中で二人の廷臣の魂が、 - 彼らの肉体は互いに抱擁、キスしている - 銅版画に彫られることになれば (自然な人間の魂はすでにその中にある)、このグループをそこに推薦することができるだろう。そこにまた一種類の性の一組の魂が互いに引きあうならば、それは通常はただこれらの極 [Polen] とともに起こる [愛と磁気の比喩]。外を見ている男は私には狡猾な抜け目のない男 [Calculateur] であるように見える。彼はクラブの中で最も酔っていない男であることを私は賭けてもよい。彼がどんなに静かにテーブルと椅子の背もたれの間に横になったかを見るがよい。人差し指でさえもコルク栓抜きと [パイプにたばこを詰める] プレッシャーが倒れないように配慮している。彼は彼のナイトキャップを持ってきた、そしてそこに絞首刑にされて壁に掛かっているものは、彼の帽子と彼のかつらである。彼は瞑想し、頭の中で何かを起草しているように見える。それが歌であることはほとんどないだろう。あるいはそれが何か韻律を持つものであるならば、それは確かに 6×6 は 36 に従う。一言で言うと、その男は自分がすることを知っている、そして私は夜を通して彼がここに座っていることから、牧師の衣服からのように、今日は株式の日ではなく、日曜日であると推測する。その時、イギリスでは脱線をすることができるのである、ただそれに加えてヴァイオリンが弾かれてはいけない。そこでも日曜日は二重の意図から投入されているように見える。贖罪する、そして将来の贖罪のために素材を集めるという意図から。ただ集めることのためにだけではヴァイオリンは弾かれてはならない。というのは、ヴァイオリンを弾くことは踊らせるからだ、そして踊りと陽気さは集めることをいくらか困難にさせるだろう。 - そのように私は常にその男について考えた、そして今なおそのように考えている。彼を自分の解説のテキストの中で仲裁裁判所判事 [Justitiarium ad pacem]、一種の裁判管理人 [Gerichtsverwalter] とみなしたアイルランド氏は最後に注の中で、それはチャンドラー [Richard Chandler -1744] という名前のホガースの製本業者、この頭部が著しく似ているまったく耳の聞こえない男の肖像画であると信じられていると言っているのだが。それはどうということはない。私はなぜ製本業者と判事が投機する商人のように見えてはいけないのかわからない。最初の男は彼の主要な仕事と並んで実際に行動している [handeln]、そして別の男は彼の主要な仕事から商売 [Handel] を作ることができる。そしてその時、(果実の) 外皮 [Schale] があまりに頻繁に核 [Kern] がなすよりももっと多くを約束しているということは知られている。それは一つの小さな文であるが、その文の真理と有益性について毎日毎日、納得する機会を世界のだれも製本業者よりもっと多く持つことは容易にはない。

その後ろの黒いかつらが本来ならば欲し、していることは完全に明瞭であるわけではない。一方で、解釈者にとって慰めとなるのだが、かつら自身がそれを知らないということはあるようなことである。 - そのように完全に世界からそらされて、すべての大英帝国 [Empire] を軽蔑しながら、そして完全に自分一人で一つの未知の世界から乏しい息をこちら側に吸いながら、そして既知の世界の中に窒息させる蒸気を吐きながら、それはおそらく哲学であるかもしれない。それであるならば、天に感謝あれ、哲学が少なくともまだ6×6は36にその地上的な極とともに寄りかかっているということ、人間的な九九の表のもとで最後に自分の墓を見出さないために、寄りかからねばならないということ。

このグループの中の外を見ている半分の耳が聞こえないのでなければ - それをわれわれはその熟慮している男からほとんど望みたくないのだが -、その半分の両者が相談しているという観念の中には何か心地よいものがあるだろう - 口でもって、しかし時としてまた椅子の背もたれを通して。おしゃべりするこの仕方は私に、私が何かを不滅のものにすることができるならばそうするだろう場面を思い出させる、一方、時 [die Zeit] のために私はそのおしゃべりする仕方を描写しなければならない。

公共の道路の上で話し合っている二人のユダヤ人がいた、そして確かにそのように人間が話し合っているのを見ることはあまりないだろう。彼らは二人とも五十代の深いところにいた、両者ともとても裕福だった(重い男たち)。まぎれもない商売の本能をもっていた。彼らがただ一つの糸を紡ぐならば、すぐにハエが大量に捕らえられた。彼らは家のそばではなく、車道のそばに立っていた、とりわけ、そこで交差する二つの道路の真ん中に。彼らは金属の鑄型の中に流し込まれ、永遠にそこに立てられるに値しただろう。彼らは互いにととても近く立っていたので、彼らは互いに触れ合った、しかしただ両方の上腕で。とりわけ一人の右の上腕は別の人の右の上腕に触れていた、そうしてだから一方の男は、別の男が北を見たならば、南の方を見なければならなかった。どちらの男も相手の男の顔を見なかった、それを見ることはできなかった、そしてそれを見ようとしなかった、自分の顔が見られるかもしれないという恐れから。腕を彼らは下に入れた。各人がいくらか上方を見ていた、耳を傾け、低い声で話し、時おり短く空の空気の部分の中に頷いた。各人の平行な眼の軸の方向の中で各人に向かい合っていた空の空気の部分の中に。彼らは確かにとても多くを考えていた、しかしおそらくほとんどあるいは何も見ていなかった。とても頻繁に彼らは優しく互いにもたれあった、まるで彼らが三角筋 [Deltoides] をこすり合わせるかのように。そして彼らは実際に少しこすりあわせた。この優しく突くことがダッシュ記号 [-] を表しているのか、あるいはそれは批准の記号、あるいは人が完全に理解しあっていることのシグナルであるのか、私は知らない。それが重要であったに違いないということは確かである。というのは、

交際と相互に教え合うことの半分は上腕を通して進んだので。芝居にとって何という場面であることか。それは描写しがたいことだ。明らかにその話し合いはある大きな共同の利益のための計画に関係していた。そこから各々が最大の利益を引き出すことを希望していた。その利益はしかし最後には正当さではなく抵抗の平等によっておそらく等分にされたのだろう。それは確かに第三者を経て行くばかりでなく、また少しは友人を経て行った。というのは、ある小さな町で一種類の商品を商う商人が友人であることができるのと同様に、彼らは友人だった。まさしくこれがモラリストにとってこの場面を貴重にさせるのである。どちらの人も計画への自分の分け前を単なる言葉と記号の中に包んで暗い中で与えた、そして、人間性の名誉のために、彼がどれほど多く自分の利益と一緒に包みこんだかを、他の人に見させることを恐れていた。眼は、落雷のように突然に理解し、理解される。そこでは、確実さがわずかであろうとも、拒絶証書 [Protest. 引受あるいは支払いのための手形の無駄な呈示の公的な文書での証明] は起こらない。それに対して耳と三角筋はまったく異なった事情である。そこでは常に触れられていない事柄 [res integra] と時間が反対措置 [Gegenanstalt] のために残っている。あの裁判官のもとでは判決と処刑は、銃声と転倒のように常に一つである。これらの人たちの場合にはまだ常に、処刑の前に、われわれはみなすべて罪びとではないのかと自問する余裕が残っている [「そこには違いはない。彼らは常に罪びとである」ローマ人への手紙]。

まだ十一人のうちの一人が残っている、彼らはここで、ポンチ酒の何が飲まれたのかを計算することなく、二十五本のワインの瓶とリキュールをからにした。二本の瓶を数え入れるならば。そのうちの一つはテーブルの上でまだ勤務外にある、そしてもう一つの瓶は外科医の手の中で敬虔な目的のために [ad pias causas] 利用される。二十五本の瓶！ 十一人の男の前哨 [Piket. 騎馬兵の小さな部隊] の上に恐ろしい砲火、しかしただ一人の完全に死んだ男とせいぜい二人の負傷者。この第十一番目の男、彼について私はいくつかの言葉を言わねばならないのだが、その男は、私がすぐ初めに四倍のもの [Vierfachen] として思った生き物である。彼は手を胸に置いている、名誉の点 [point d'honneur] がある側面ではなく、わきに、ふだんは何もない右の肺翼の上に。腕をバッタのように後ろの方に高く折り曲げることはだらしのない身振りである。彼は、何の役にも立たない人が追従する [schwänzeln 「尾を振る」の意味もある] ときに断言を示唆しているように見える。というのは、それを幾人かの人は手でもってすることができるのである、いくつかの猿がはるかに適切に尾でもってつかむように。彼は泣いている、そしてそれがたばこを吸うこととうまく折り合わないで、彼はパイプを口から離してしまった。それはなんとという口 [Maul 動物の口] であることか！ 弁護士の口 [Mund] と比較すれば。彼は世界における法と正義の不足につい

て嘆いていると人々は思う。私はまた、眼を通してワインから解放され、それから自分に対する多くの追従のもとで政府と正義の不足について嘆く人々を知った。彼らの存在すべてはまさしくこの厳格な正義の不足のおかげなのだ。

彼がまだ順番を守っていたとき、士官が配置されていたその個所に、彼の軍需資材の一部が絵画的に組み合わせられているのが見える。そのたばこのパイプは空中に突き出ている、そして、それ自体もっと確実に横たわっているわけではない空っぽの瓶によって穴の中に墜落することを妨げられている、その穴の中に彼らの主人はとて名譽ある形で入っていったのだが。それは確かに、ホガースが死体の上に掛けた装備である。その隣に一つの冊子 [Blatt] がある、Freeman's Best [イギリスの文化史の中には幾人かの有名な Freeman という名の所持者がいる。しかしこれらの誰もここでの暗示には問題にならない]。これはたばこの紙であることも可能だろう。Freemanni Oputimum subter Solem [Freeman の太陽の下で最善のもの]。あるいは政治的な冊子、あるいは、ドイツの多くの冊子のように、同時に両者。ここにそれは故意に紋章のモットーとしてある。Summum bonum [ストア学派の人] 自由に生まれたイギリス人 freigeboener Briten [[ホガースは通常一つの手をたたきで二あるいはそれ以上の手を打つので、それはおそらく同時にバランスを崩した士官の上への小さな Parentation であるかもしれない。その士官の席の前に紙片がある、そこには自由に生まれたイギリス人の最良の特権と書かれている] ゲッティンゲンポケットカレンダー 1786年]。(タバコとワイン、そして - そのように墜落すること！)。

タバコを吸う習慣は今イギリスでは少なくとも上流社会においてはとてもすたれた。瓶はそこではますます多くサイコロと一つにあわさった。ジョンソン博士は、ジョン・ホーキンスがその生の中で報告しているように、何度も重要な発言をしている、自殺はイギリスの最善の階級の中では、人々がタバコを吸わなくなって以来、とても増加したと。それはまた確かである、高い賭博の際に、生と死がサイコロで賭けられるところでは、たばこは吸われない。ここでサイコロが振られたならば、パイプはすべての瞬間に消える。おそらくクラブの多くの会員たちは自宅で一人で、製本業者がそこで壁の彼の帽子とかつらにさせていることをするかもしれない。ホガースはまたわれわれが将来見るようなサイコロの場面を名人的に表現した★。

★ 六番目の版画における放蕩者の生の中で。

最後にすべての解釈者が見過ごした小さなしかし滑稽な描き方 [Zug] を。これは、われわれが観衆に呈示しようと考えている作品全体を通してほとんどすべての版画に一度以上も該当する事実である。すなわち時計の文字盤の上の明るい斑点は何を意味しているのか。明らかに次のこと、太陽はすでに部屋の中に輝いている、倒れた燭台や戦争装備の鋭い影や明

るい光の斑点に、ポンチ酒鉢の凹凸の側面に見られるように。だからその上の明るい斑点は間接的な太陽光である、その太陽光は、ここには不足していない何かの液体によって投げ返されている。薄暗闇の中の大きな湖からそれが来ることは難しいだろう、その湖は波打っているからだ。その太陽光はだからおそらくもっと小さな内陸の湖から来ているに違いない。それがクローキーナ [Cloacinen 下水道の女神] の壺からであるならば！ その壺は実際に少し太陽によって軽く触れられる。その斑点がどこに由来するのであれ、それがこの静かな液体の一つに由来するならば、太陽光が水平線とともに作っているその角度は常に朝の四時にとっては強すぎる、ロンドンの昼の一番長い日においても。だからホガースがそれでもって次のことを言おうとしたということは可能だろう。太陽に従えばそれは十時であると。少なくともこれは完全に彼の手法の中にある。まったく言語の中で話せば。言語の中でホガースは汲めども尽きぬひとであり、確かに彼の表現豊かな頭の中よりもずっと到達されるのがむつかしい。 - そのように時計は本当に本当の時間も原初的な時間 [Urzeit] も示していない、まさにこれらの人間たちのように。そしてそんなに多くの人たちが集まり、彼らの道がそんなに不正確である部屋の中において一つの時計が静かに進むことができるということはどうして可能だろうか。

一日の四つの時刻

朝 Morning

朝 Der Morgen

[18世紀に、絵画、音楽と詩の、とりわけ四季のシリーズの中で非常に好まれたテーマ]

多くの作家や芸術家が感じようとしなかったことを、つまり自然が彼に本来的に定めていたことをおそらく感じていたホガースは、この一日の時刻の表現のために自分を選んだ、春や夏の朝の魂を高揚する偉大な場面ではなく、冬を。そしてその場合でもまた霜で砂糖漬けにされた茂みの死体華美 [Leichenprunk] ではなく - そこでは自分の蘇生に向かって眠るのだ -、あるいは自分の薄片状の重荷の下でため息をついているトウヒの森ではなく、そうではなく - 野菜市場、ロンドンのコヴェントガーデンを。そこに彼は在宅している。また彼の天才は田舎の五月の朝の中でわれわれに何を表現できただろうか。おそらく一般的に知られている廷臣の物語をもった一組のいまいまいしいナイチンゲールを捕まえる人。彼らは優美

な歌手たちを罠に誘い、太陽が彼らの細かい仕事の上に昇ることに気づかない。あるいは曖昧な評判の数人の美しい人、彼らは集められたマイタイ酒 [Maitau] の瓶を互いの頭に投げつけている、マイタイ酒が洗い落とすことがないだろう身振り顔のしわとともに。冬の風景から生まれてきたかもしれないものを、読者はすでに読者がここで野菜市場の冬の朝から見、読むであろうものから推測できるだろう。

教会の時計に見られるように、8時である、とても寒く、そして雪がある。その前景に描写されているのが見える人物たちは小さな木製の靴 (*pattens*) の補強金具 [Beschlag] をつけてこちらに来る。その木製の靴の中に女性の歩行者たちは入るのだ、靴と足の利益のために泥の汚れから数ツォル上を漂うことができるために。彼らは1738年 [Four times of the day シリーズ制作の年] にはそのような印象を作った。今すべてはもっと多く整理されている。この小さな補強金具がロンドンの足のせ台 [Fussbank。まだ固まっていない道路を足をぬらさずに横断できるために] の上で作る響きは一人の外国人にとっては悪くは見えない。とりわけ通常そうであるように、女性歩行者たちが美しければ。だから人々は時おり、騎兵 [Reuterei] が、少なくとも軽騎兵が来ると思うのだ。

その版画全体の主要人物、— 雪とつららを持った冬の空と冬の地面のすべての残りの素晴らしさはその主要人物にただ枠として仕えている —、その主要人物は中央の美しい女性歩行者である。見てわかるように、彼女はたえず教会もうでをする女の最初の段階の年ですでにいくらか超えている。その教会もうでの女の二種類の義務、天に対する義務と隣人たちに対する義務を彼女は朝、部分的には為した、部分的には為そうとしている。彼女は教会への途上にいる。それが一日のある時と同様に一年のある時であっても。その時においては、そのようなことをするという決意は完全に罪深い心には決して与えられない塗油を示している。そして彼女はどんなに隣人を配慮しなかつただろうか！ というのは、人間は自分自身のためにはそんなに自分を飾らないからだ。彼女は今朝すでに四時に始めたに違いない。だから光のもとで。その時、多くのものが実践の中で、理論が与えたほどの結果にならなかったにしても、驚く必要はない。昼にはろうそくが必要でないくらい教会を明るく建てることは教会建築における一つの有名な規則である。というのは、光のもとで仕上げられるすべてはまったくただ光のもとで利益とともに給仕されることができるから。そうして私はこの婦人がランプをもって歩くことを考えるべきだろう。人はここで一緒に、冬を当てにしなければならぬ。雪の光と寒さのある種の花は特に好むわけではない。それらに利益とともに近づくことが許されるのは、桃の花だけである。しかし今はただ真剣に、そして対象にふさわしい形で事柄について。われわれはここで1738年に一人のお嬢さん [Mamsell] を持っている、彼女は今なお輝こうとしている — そのためにはおそらく前世紀の終わりころす

に時間的にいくらか遅すぎたのだが、*魅力的に*。美容絆創膏（*mouches*：付けばくろ）が花咲いている眼のまわりに漂っている。蛾がろうそくの周囲に漂うように。それらに張り合おうとする若者の視線への一つの警告。頬の上にはもちろん、静止している文字を持った受洗証明書のようなものが見える。それは実際にはそうではない、それはしわである、本当だ、しかし、それらは確かに口元から由来している、その口元の中でアモル〔恋愛の神〕は明らかに彼の小さなたくらみをしている。この優しい戯れは小さな波の中で頬に伝えられる、それらの波はますます多く広がりながら、水の輪のように最後には耳の後ろまで移動する。胸の上にはまだそれらの波の優しいうねりが認識される。そこにすでに氷が始まっているにもかかわらず。右の腕は冬服をまったく無頓着に、軽くあてがわれて身に着けている、一方で手は太陽うちわ〔*Sonnenfächer*〕をもって（冬に？）唇を助けるために急いでいる。唇はこの飾り微笑みの際に歯の抜けた隙間をまはやひとりでは覆いかくすことができない。一方でそのうちわを保つには二つの指と唇が必要である。その素晴らしい子供はすべてをなるとまじめに考えていることか！ 私は賭けてもいいが、唇は手がうちわをつかむように一語をつかんでいる。首を支える仕方は一つの傑作である、とりわけ上半身の優しい傾きの際に。それはまるで首が優しいしなやかな抵抗によって三角旗の壮麗な〔*glorious*〕飛翔〔帽子のベール用の布のこと〕を促進しているかのようだ。その三角旗は頂から朝の空気の中に流れてくる。――しかし、この三角旗がすたれなければならないとは！ その時代はもうない！ 今、教会が終わると、顔立ちは、一つのパンの施し物が終わるときのように輝かしく見えない。かつてそれは一つの船団が世界のすべての素晴らしいものを乗せて出港していくかのようであった。それが進んでいくところに、勝利が続いた、すべては敬礼した、そしてすべてのものが帽子を取った〔服従した〕。それは抗しがたいことだった。

その婦人は未婚であるばかりか、また結婚したことがなかった。解釈者はみなそれに一致している。そして私はそれに反論できないと告白しなければならない。長くお嬢さん〔*Mamsell*〕であった人はこの身分が残念ながら必然的にするすべての小さなけばけばしさとともにそれに慣れる、そして最後に、気取りが増大する、気取りがますます必要になるからだ。そしてただお嬢さん性の、あるいはお嬢さんの死でもって終わる。それはだから何かがそうであることが可能なように人間的である。著しく賢い人間がカリヨストリ〔*Cagliostro 1743-95*〕のように五百年間生きるならば、彼のより厳密な知恵を売り込むために、最後にまた推薦-顔〔*Recommendationbs-Gesicht*〕をしなければならないのかどうか、私は決定したくない。その顔はわれわれの活気にあふれた哲学者あるいは天の天使たちにこの乙女の顔がわれわれに見えるのと同じように見えるに違いないだろう。人間は、彼がすでにいる道の上で単に習慣から死ぬことなくしてはもっと良くなることはできない。私は、誰かがすでに

死ぬ日を婚姻の日と呼んだかのように予感がするのだ。「美しい霊たちが出会う Les beaux esprits se rencontrent」[仏語。Bel Esprit。引用は不明]。哲学とお嬢さん性のように。

解釈者たちが決定的な判断として決めたかもしれないことは、おそらく主観のすぐれた乾燥性である。ニコルズはそれを自分の意志によらない未婚の疲労こんぱいした代表の女と呼んでいる[この言葉はニコルズには見出されない]。もちろんすべての長い期間の火の見張りは健康の害になる。ヴェスタ[かまどの火の女神。処女がVestaの祭壇の聖火を守る]の火を守ることももっと多く害になるものはない。ヴェスタの処女的な慢性の鉛中毒[Hüttenkatze]は、おそらく普通のそれが装飾品職人[Metalschmelzer: 金属を溶かす人]を奪うのと同じくらい多く心を溶かす女を奪う。そして、公明正大な天よ！しかし金属を溶かす人はわれわれに金属を残す、心を溶かす女においては溶かす人と金属は失われる。— 憐みを、憐みを！と、私がまさにその聖なる女の眼の中のトム・キング Tom King のコーヒーハウス[ロンドン、コヴェントガーデンの市民の出会いの場。1739年に法によって閉鎖された]の場面への視線に気づかないならば、私は胸をいっぱいにして叫ぶだろう。その視線はそれを抑制するだろうが。まだすべてが失われたわけではない。共鳴板や音響板は結婚生活における幸福を害さない。非難のつぶやき[Reprochen]はそれによって明瞭さを受け取る、[ベッドカーテンの中から女房が遅く帰ってきた亭主に言う] 閨の小言はもっと多く生を受け取る、そして奉公人のための命令はもっと多くいくつかの階を通る必要な音響の広さを受け取る。その音響の広さなしには家政は存続できない。この版画[Schnitzbild]は、それがそこにあるようなそれは、われわれの良い芸術家にとって高いものにつくことになった。それはつまり一人の老嬢の肖像画である、その老嬢と彼は親戚ではないが、少なくとも彼女をととてもよく知っていた。最初から彼女は彼女の男友達のこの作品のこの個所にととても満足していたようだ、おそらくその愛されたオリジナルとの大きな類似性のゆえに。それが世間の陰謀を単に知らないことに基づいているにもかかわらず、この稀な人の良さはおそらく、彼がその善良さを表明した女性主人公を削除しただろうことに値する。決して欠けることはないある種の良い友人たちはその素晴らしい人物を残させることを彼に忠告した。しかし同時に、そのような振る舞いの醜聞をその婦人に理解させようとした。それで結局その絵は残るようになったが、しかしその代わりにホガースはそのオールドミス[Matronelle]の遺言から削除された。その遺言の中に彼は、彼女が彼にととても十分に遺贈していたので、とどまりたかっただろうに。一人の老いた叔母を相続しようとする人は、五十歳を超えた女性について風刺をしてはいけない、四十歳以下のすべての女性について風刺することははもっと良い。トム・ジョーンズの読者にとっては、ここで、フィールドディングが彼の男性の主人公の母とブライフィル[Blifil。「トム・ジョーンズ」に登場する Squire Allworthy の妹の息子、

偽善者で卑劣漢]の母を、彼女の姿に従って描写しているところで、彼女はこの婦人のように見たと明白に言っていることを思い出すことは心地よいだろう。[「私は、それがもっと器用な名人、偉大なホガースによって銅版画にされていないならば、彼女の肖像を自分で描くことを試みるだろう。彼女は数年前にホガースのためにモデルになったのだ。最近ホガースは彼女を銅版画で表した、「冬の朝」という題の。そのために彼女は悪い象徴ではない。そこに彼女がコヴェントガーデンに歩いていくところが見られる、彼女の祈祷書を携えた一人の飢え衰えた従者を従えて」「トム・ジョーンズ」から]。そしてフィールディングは、知られているように、彼女をとってもよく知っていた。人がこれを知っていれば、トム・ジョーンズはもう一度よく読まれるだろう★。

★ フィールディングは彼の描写に生を与えるためにこの手段をよく利用した。そして確かに大きな利益とともに。上で言及された二人の身分の高い若い紳士の家庭教師はホガースの中に現れる、そしてわれわれの読者は彼を見ることになるだろう。この点で一つの幸福な選択をするすべを知っている小説家は彼が描こうとする性格のところすでに半分以上をしたのだ。というのは、読者は彼よりも前にあらかじめ仕事をしているからだ、そして自分で彼が読者を持ちたいと思うところへ行くのだ。われわれはドイツではこの種のそのように一般的によく知られた銅版画を持っていない。われわれの詩人たちが狙うことができるような。ドッペルマイル [Johann Gabriel Doppelmayr 1671-1750] の天の地図以外には。そこにはいくつかの絶望的な顔たちが現れる。その場合、われわれは二倍の利益を持つ、彼の主人公を描いたばかりでなく、また同時に星のもとに移したという利益を。

彼女の後ろの少年、あるいはそれがそこにあるものは、彼女の従者である。その哀れな奴は半分の食事しか与えられていないばかりか、半分のお仕着せ衣服しか与えられていないように見える。そのお仕着せはさらに、*生きている人たちの間の贈与* [donatio inter vivos, donatio mortis causa: 「死亡予期贈与」からの造語]、*下降する直線の中で in linea recta descendente*、彼の第六のファーストネームから由来しているように見える。彼はだぶだぶの靴 [Schlappe] だけを履いた。というのは、彼の足はすでに凍えていたのだ。ポケットカレンダーの中で私は言った、彼は長靴下をはいていないと。これは私にある分別のあるイギリス人、ある男によっていくらか悪く取られた。その誤りは容易に改善されている。私はだから言う、彼はおそらく長靴下を身に着けていると。これよりもっと惨めなもっと飢えた、もっと凍えたものは容易には考えられない、そこにはもちろん内的な平和が欠けているわけではない、その平和は彼の眼と唇の周りに漂っている。彼の腕の下に彼は分厚い祈祷書を持っている。おそらくこの婦人がこのすべての不都合なことに対抗して与える唯一の慰め。老いた金持ちの叔母たちはそのようなことをする、とくに遺言についての熟考を重ねるときに。彼女たちはそれからもっとよく繁殖する [hecken]。

左手にいわば聖パウロ教会 (St Pauls Coventgarden) [この教会は1797年に焼け落ちた]

ー それをシティ [City] の中に立っている★有名な聖パウロ教会 [St. Paul's Cathedral] と混同してはいけない ー に増築されたように、当時とても評判の良くないふしだらな家、トム・キングのコーヒーハウスがある。ホガースは熱心に、その巢がまるで聖具室であるかのように見えるようにその視点を選んだ。それは本来は一つのみすぼらしいバラックだった、その煙突はこの美しい教会の前園亭 [Vorlaube] のアーキトレーヴ [柱の上部に水平に架けられた角材] よりも低かった。ここで起こり、殺人で終わることが稀ではなかった不品行は描写できないほどだ。トム・キングの死後、おそらくそこのドアの前に立っている貞淑な未亡人はその悪魔的な飲食店を継続した。ついに正義が目覚めるまで。ホガースがこの版画によって正義を目覚めさせるのにかなり貢献したということはあるようである。風刺的な芸術家にとっての一つの素晴らしい全景図！ 一つの事柄について噂を立てること、身分の高い人の食卓におけるように、ピアホールの中で、そのために彼にはいくつかエッチングの筆を動かすことで十分だった。ロンドンの警察は厳格な、賢い、秩序をもたらす婦人である、しかし彼女には、多くの正直な人々にとってそうであるように経過する、彼女の従者たちは時おりまったく役に立たない。そしてある物は、一番近い裁判所で聞かれることなく、とても長い間極悪非道であることができる。司法を目覚めさせるのを助けたのはホガースだったと私は言う、というのは、これらの版画は1738年の終わりに現れた、そして1739年にマダム・キングは没収された。判決は、彼女は聖具室を取り壊さなければならないというものだった。千二百ターレルの罰金を払う、数か月間ニューゲート [Newgate。ロンドンの有名な悪名の高い牢獄] にぶち込まれる、そしてまだ金銭刑は片づけられていない、更に最後のヘラー [少額銅貨] までの支払いが残っている。その他にかなりの金額の保釈金を払って少なくとも次の三年間は良く身を保つことを保証 [cavieren] すること。これはイギリスの司法の素晴らしい手段である、少なくとも、そのような仕事で飛んでいて方角を失った人間の翼を切り取ることは。彼らが再び飛んで方角を失うならば、保釈金は失われる。そして正義は通常はいくらかもっと深く切断する、あるいは鳥を更に切断なしに、状況判定に従って、縛り首にする。一方、マダム・キングは支払い、身を良く保った。そして聖パウロ教会の残りの供物ベニヒから、ハンプステッド [Hampstead] から遠くないところに三軒の別荘を建てた、ロンドン近郊の美しい高台にある村に。それらは今日でもまだ *Moll King's Row* [情婦キングの通り] と呼ばれている、そこで彼女は1747年におそらくベッドの上で死んだ。口述された罰から、同様にへそくりから、読者自身が、この神の家の柱のもとで何が行われていたのかを判断できるだろう。

★ オリジナルの銅版画の上ですべては正反対に立っている、しかし不正確に、ロンドンとロー [Lowe] の有名なホテル（それはここでは右に見られる）を知っている誰の眼にも明らかなように。ホガー

スが彼の絵画の複製を描き直す苦勞を常にしたわけではないということの再度の証明。アイルランド氏の作品の中でも、それ故にこの版画はわれわれのもとでのように描かれていた。

そこでは前の夜暖かく経過したに違いない巢が開かれるところだ、というのは、彼らは屋根の上の雪を溶かしたのだ。最初に飛び立つものは、第一級のかつらである、しかしながら[かつらの]主人の偽りの女友達。かつらは主人を窮乏の中、禿げた頭のまま殴打の中に立たせている。かつらは攻撃をかわすのを助けるべきなのだが。このかつらの飛行の中には滑稽なものがある。その家のドアに案内されるのが学識あるクラブであるならば、人はそのかつらを薄暗闇の中で少なくとも、夜の間議長を務めたミネルヴァ [知恵の女神, アトリビュトは梟] の鳥とみなすだろう、あるいはスペンサー Spencer のハーブのように、明けの明星に挨拶するために天に揺れ動くリラとみなすだろう [Edmund Spencer の「時の廢墟 Ruins of time」から。「彼はオルフェウスのハーブが天に向かって上昇するのを見た、そしてこの飛行の中で風に動かされて天上の響きを広げるのを聞いた」。そこで吐き出されるクラブの前衛は自由にされた野獣のようにいくつかの罪のない生き物に襲いかかる。そのうちの一つの生き物は園芸植物を売るために、もう一つの方は手提げかごをもって買うために朝早くやってきたのだ。へり飾り帽子 [Bortenhut] の人はアイルランド人であろう。彼のかつらは彼に忠実にとどまった。かつらはしかしそのために奉仕してかなり苦しんだ。頭の上以外のすべての場所にあればそれはもうかつらとみなされないだろう。 - 火の隣に一人の生き物が座っているが、それはほとんど人間のように見えると言うならば、それは称賛しすぎである。彼女 [sie, 老婆] は口のきけない人のように見える、あるいは鼻音 [nasales] はひょっとしたら戦いの中で苦しんだに違いない。というのは、首に彼女は薬瓶のように一枚の紙片を持っている、その紙片の上にはそこに探されなければならないものが書かれている。それは彼女の物語である。この物語を彼女はしかし今度は老嬢には与えない、そうではなく恐ろしい事実 [Facta] 自体を。つまり彼女の顔を。彼女は物乞いをしている、彼女はおそらくお仕着せを着た乞食の男を見たくないのか。しかしその乞食は彼の主人の人間愛に話しかけている。そしてそのために凍えている。ここでは公的にひょっとしたら緊張した虚栄の何かが期待される。

背景には悪名の高いフランス人ドクター・ロック [Rock] が彼の看板と飲み物をもって立っている、自分と彼の飲み物を推薦している、彼のパン病気 [職業の病気。飲酒のこと] にゆだねられた状態の人たちに。彼自身は、そんなに朝早く、寒いにしても、すでに数人の耳を傾ける人を持っている、その中にはまた (寒さと人々のゆえに) 頭巾を被った女性も。ドクター・ロックは彼自身に完全に似ているようだ、ほんとうにわずかの筆使いで肖像が描かれているにもかかわらず。ホガースはこの男に対して並外れて好意的である。どの機会にもホ

ガースは彼を後世に推薦している。この男はホガースにどんな良いことをしたのだろうか。

あのグループの前に、まったくかわいく表現されて、幾人かの小さな学校生徒がいる、彼らはカタツムリの家に似ている学校カバン (satchels) を背負って、彼らのカタツムリの歩みを学校に向かって続けている★。これは今静止しながら起こる。彼らの注意はまだ燃えているランタンによって活発にされている。そのランタンをすでに数日前に出かけたに違いない一人のとても活発な荷物を背負わされた女が掛けたのだ。

★ カタツムリのようにいやいやながら学校へそっと歩きながら Creeping like snail unwillingly to school. シェークスピア As you like it から。

時計の文字盤と上昇する蒸気の中に *Sic transit gloria mundi* (そのように世界の華麗さは前進する [Patricius 〈猷辞の中で名を挙げられるカトリックの僧たちの最初の僧〉の引用] と書かれている。そのように人々はもやと時針の間に選択を持っている。回帰の希望を持った、あるいは持っていない過ぎ去る華麗さ。私はこの上からの小さな閃光は三角旗のあるトップマストに向けられていると思う。かわいそうな叔母さん！ 彼女は煙の方に手を伸ばさねばならないだろう。

ウィリアム・クーパー William Cowper [1731-1800 精神錯乱の中で死んだ。彼の冷静な教訓性にもかかわらずロマン主義の先駆者とみなされている] の Cowpers poems 第一巻 80p の中に、十音節の韻を踏んだイアンブス [短長抑揚格] の、老嬢と彼女の召使のとてもよい描写がある。それはおそらく読み返されるに値する。私はそれからいくつかの列を利用した。しかし私にはサミュエル・バトラー Samuel Butler [1612-80] の有名な詩句の流儀 [Versart] と Bath guide の著者 [アンステイー Christopher Anstey: The New Bath Guide 1776 年] によって利用された仕方がそのテーマにふさわしいように見える。

正午 Noon

正午 Mittag

この版画は、すべての解釈者が一致して断言するように、ロンドンの *Hog-lane St Giles'* のフランスふうの礼拝堂を表している。この道路と同様に隣の地区は当時ほとんど完全にフランスの難民とその子孫によって住まわれていた。それ故に人々は、そこ教会にぶら下がっている紙製の竜をこの民族に当てて解釈した。この民族は宗教的な嵐 [ユグノー派 (フランス

の新教徒)の迫害]によって海峡を超えて押し流され、ここに一つの安全な避難所を見出したのだ。しかしこの竜については後でもっと多く。この *Hog-lane* がどんな通りであり、あつたに違いないか、それを読者は容易に推測することができるだろう。彼が *Hog* はドイツ語で豚、*Lane* は狭い道あるいは小路地を意味することを知るならば。運命がホガースの関与なしにフランス人を、ホガースがフランス人たちを確かに自分でそこに置いただろうところに移動させたということは善良なホガースを魂の中で喜ばせたかもしれない。つまり、雌豚路地に [Saugasse]。というのは、今は亡き [sel.] フランスは彼よりももっと断固とした敵を持たなかっただろうから。豚小屋と *Lutetia minor* [小パリ] は彼にとって同じことを意味していた。そもそも当時、聖アイギス [St. Ägidien] (St. Giles) 牧師教区全体において高い程度にパリの [lutetisch] 進行したに違いない。1625年に建てられたそこの教会の床が1730年にはただ無秩序によって道理よりも8フォート深いところにあったということは見て取れる。人々はそれを新しく建てなければならないことをわかっていた。

ホガースのフランス憎悪の痕跡をこの版画は確かに十分に持っている。それどころかそれは全体においてフランスの歴史、人物と衣装に対する本当に殺人的な攻撃である。この章に来ると、彼はほとんど中庸にはとどまらない、また残念ながら！ ここではその場合である。

背景の塔の時計を見ると、今は11時であり、教会は終わっている。フランス的な礼拝堂のドアは開かれている、そして聖職者的な群れが言葉を詰め込まれてその教会から流れ出てくる。たいていのメンバーたちは、何かの旅回りの奇蹟をおこなう治療師がここで彼の臨床的な集まりをし、そして今まさにその移動する病院を解雇しているように描かれ、表されている。男性の主要人物はおそらくダンス教師である、というのは、ホガースの原理によれば、フランス国民の最大の部分はダンス教師からなっているから。彼がダンス教師でなければ、彼はそれであるに値する。彼は金銀の組みひもを縫い付けられた衣服と重い装飾された鞍敷きの華麗さでもってほとんど膝を覆っているチョッキ姿である。その人物全体は信じられないほど多くの情愛の深さと甘いものを持っている。少なくとも意志の側面から。その人物は一つのメニューエット・パ [Menuet-Pas。ダンスステップ] の中に立っている。左手はいくらか下方に下げられており、関節のところでも再び後ろの方に曲げられている。婦人に対する隷属した態度の誤解することのできない表現。右手の関節のところ、流行の籐の杖がぶら下がっている。人差し指の先端は繊細に親指の先端の方に曲げられている。そして両方は一つの輪を形成している。とても繊細な一つまみの嗅ぎたばこのためにはあまりに繊細に閉じられて。そうではなく、枠にはめ込まれていないダイヤモンドを光に向けてよく調べるように。とても美しい、そして意味深長である。彼はすなわちこれらの図形でもって、たいそう魅力的であるわけではない口の中からいくらか広くいっぱい走り出てくるように見える言葉を

まだ走行中にもっと繊細に紡ごうとしている。この身振りは説教壇や教壇ではまれではない。口が吐き出す役に立たない燃え殻に、時おりまだ飛行中に、杵にはめられていないダイヤモンドの外見を、あるいは紡がれる麻の外見を、紡がれた絹の外見を与えようとするところでは。なるほど華奢にだがいくらか長く彫刻された口を持った婦人はそもそも一つのそれ自体広い言語器官を意図的に狭めることによって彼女の考えに推進力を与えたいように見える、彼女の愛人、あるいはおそらく彼女と新しく結婚した男が彼の言葉に親指と人差し指でもって与えようとする推進力を。彼女が教会のドアからほとんど二歩も離れていないにもかかわらず、彼女はすでに右腕でその男の肩にもたれている。これは張り骨入りのスカートが影に投げ入れるべきあらゆる種類のものの上に光を投げる。そのスカートの完全に固有の奇妙な歩みはつまり全体にもっと多くの外観とレリーフを延長によって与えるために選ばれているように見えるよりはむしろ、いくらか目に見えすぎようになる自然な延長、描写を必要としない延長をあいまいにしているように見える。ドレスはすべてのウェストと調和する、そしてすべてのウェストの場合、引き潮と同様に満ち潮とも調和する [覆い隠された妊娠のこと]。ドレスが歩みの中の一つの小さな不正確さを覆い隠すということも可能だろう。最初の結婚からのその小さな男の相続人 [張り骨入りスカートのこと] はその不正確さをそんなに良く隠すことができない。私はここでわずかの大きさのめかしこんだ若い人間について語っている、彼は髪袋、ソリテール [宝石一つの耳輪など]、ステッキと短剣で目立つようにされて先頭を進む。ダンス教師は彼の父であるかもしれない、その父はもちろん彼の息子の身体の側面から彼の仕事のための支持をほとんど期待することができない。しかしそれは通常はそのように経過する。*Heroum filii nequam* 英雄の息子たちは役に立たない。一方とても大きな安楽さを持ったこの小人が彼の袖の Silberblick [銀を溶かす際の手工業の中で、銀の凝固とともに覆いを破って現れる輝き] を捕まえるということは彼の精神を身体に似ているように描いている。これらの版画の上では特に、ホガースが厳密に観察したと言われる1738年の流行が考慮されるに値する。われわれの婦人ではリボンの状況が特に注目すべきである。だから途中で、帯の痕跡がなければ、私はそれがかつて見たことを思い出さない。三色の平等帽章がそこで身につけられているのかどうか。この明るく前衛の後ろではとても暗く見える。二人の恋人たちの若々しい頭ともいくらか鈍いピラミッドを作っている老いた頭はそれらと素晴らしく対比されている。その表現は羊小屋のドアにとっても近いこの二人の振る舞いについての正当な立腹であるように見える。その立腹は、二人の振る舞いを自分ができないことについての不正な立腹と結びついている。七人のすべての頭部は閉ざされた鉄のような教義論の象徴である、骨までむさぼり食った塗油の象徴である。これに対しておいてある人が反論した。それは洪水を太陽うちわであおいで元の方向に再び向けようと

することであると。それがかつては生き生きとしたものであったとしても、彼らの信仰は少なくとも今、化石の状態に移行した。ダンス教師の肩のすぐ後ろの顔を見よ、教会のドアの中の *Domine* 「Stiftsvorsteher 宗教団体の責任者」の顔つき、彼の前のうなだれる女 [Kopfhängerin: 頭を傾けている女] の顔つきを見よ。うなだれる男 [Kopfhänger] は男である、あるいはその言葉は頭を自分の前に傾けている男から取ってこられたと思うならば、それは間違っている。否！ それはしばしばとても実直な人々である。そうではなく、それは、頭を横向けにしている、ほとんど正直ではない、狡猾な立ち聞きする人から由来している、耳を常に上に立てて、彼の無邪気な隣の人に聞き耳を立てるために、あるいは天使が歌うのを聞くために。右では、二人の水夫によって愛のキスが交わされる、そしてなんとという親密さでもってか！ 魂がお互いの中に流れこんだように見える、そして鼻は、それが強靱で、身体的でなければ、その例に従うだろう。

これらの水夫たちのすぐ後ろに一人の聖人が壁際に密着して立てられている。説教は長く続いた、しかし彼は離れることができない！ そこで道路の中に移動している身障者たちのグループはわれわれに背を向けている、だからわれわれは彼らをそのまま移動させたい。かつらとビールかごのような縁なし帽子のその少年あるいは小人と彼の妹は誇張されている、そのようなものはただ通過するだけだ、もしそれが控えめに述べられているならば、そしてその上もっと良いものができるということを証明している描き方で添えられているならば。しかしこれはこの教区のホガースの表現に当たるとてもわずかな非難である。それはフランス人ではない。ありえない！ そして 1738 年の外国のプロテスタントのフランス人である可能性は最も少ない。ホガースは確かにこの人間階級を知らなかった。私が彼らを見たところで、私は決して彼らにそのようにまとめて [in corpore] 出会うきっかけになることができる一つの列 [Zug] も気づかなかった。彼らはむしろ至るところで社会の飾りだった。彼らの中年婦人たちでさえも。どのような上品な楽しさが老年を包み、それを通して畏敬の念を起こさせるものになることができるのか、見本を学ぶために。ホガースがここで描いたものは、イギリス人たちである、メソジスト派のあるいはさもなければ宗教的なイギリス人、メソジスト派の祈りの家 [Tabernakel] の中のイギリス-メランコリックな夢想者が描かれている。そこでは暗い宗派の空が地上に重く横たわっていた。ここにはあの民族のバラ色の空の何もない。そのバラ色の空はこの色の中でもつねに崇拜に値する形で、同時にいずれにせよつまらない生の享受のために必要な距離を保っている。まさしく説教が終わったときのメソジスト派の祈りの家の中に掛けられて、竜は今や一つの別の説明を許すだろう。精神を通しての大きな精神-可動性の熱狂者たちは、どの説教壇空気によっても容易に高められる、そして神性の方に漂っていく。その神性の本質と彼らは混ざり合うと信じるのだ。彼らは震

え、燃え立ち、言葉で表現できないものを聞く、風が弱まると、彼らは落下し、一番近くの道路の隅にくっついて離れない。

その版画の反対側で芸術家は彼の分野に戻る、そしてそこでわれわれは喜びの中で彼を眺める。最初に鍵の中に洗礼者ヨハネの頭部を持った家、*good eating*（おいしく食べる、あるいはここで良い食事ができる）の説明文とともに。ライオンあるいはオオカミの二つの犬歯、その中でそのモットーが括弧に入れられているようにみえるのだが、それらはここでは挿入要素 [Parenthese] 記号であるよりはむしろ、挿入要素そのものである、*良い食事* [Gutes Essen]（つまりそのような齧 *Gebiss* のために）。ロンドンでは同様にたいていの家が標識を持っている、しばしばその住民の身分あるいは職業に少しの関連もない標識を。ひょっとしたら、洗礼者ヨハネの頭部がすでにそこにあった後に、レストラン主人がそこに引っ越したのかもしれない。そのすぐとなりには、火酒醸造者 (*distiller*) の家に - 門の上のジョッキ、あるいはその家の周囲にぶら下がっている木製のジョッキがほのめかしているように -、*頭部のない一人の女性の標識*、その下に *the good woman*（良い女）と書かれている。だからそこに身体のない頭部、ここに頭部のない身体。イギリスではドイツでのように最善の女たちは最善の頭を持っているのだが、そのイギリスでそのようなものが許容されることができた、そして今も許容されているということ、それは私には理解できないことだ。その思い付きはホガースのものではない、というのは、実際にこの表象はロンドンではとても普通であるからだ。そしてアイルランド氏が述べているように、今特に色彩商人 [Farbenhändler] に固有のものである。それを私は理解しない。頭部のない人間はそれに対して火酒醸造を悪くは表していない、というのは、火酒は精神 [Geist. アルコールの意味もある] を頭部の個所に置くからだ、そして精神は描かれることができない。しかしそれでホガースは満足しない。ちなみにそこで、まだ本当の時間に食事がされるこの家においては、彼は亭主とその良い妻の間に食事についての一つの小さな論争を生じさせる。これを彼女の善意はとても悪く取るので、彼女は羊のもも肉を野菜と一緒に日曜日に、道路上の聖人たちの上に投げる。それは正しい。というのは、食事が投げかけることによって良くならないにしても、それはまさに上でもっと多くの平静とともに食べられるのである。堅牢な恵みが上から来るのを聞いている幾人かの通りすがりの人たちが、あるいは堅牢な恵みを液体の恵みがすでに彼らの衣服の上に前もって予告したので、突然下の家の中に逃げ込むことは愉快である。汚れのための補償を要求するために、あるいはわか雨が過ぎるまで待つために。ある人はすでに幸運にもほうきを所持している。まるで彼が、良い食事を下で拾い集めるためにやってきたかのよう

に。前景の左手に、ちょうど縁起の悪い頭部の影響のもとに、*良い食事*は舗石の上や舗石をこ

えてますます多くなる。一人の少年が陶器製の鉢の中のパン屋で焼かれたプディング (baked pudding) をひびの入った鉢にとってはいくらか強く支柱の上に置いた、鉢はその上で二つに割れ、プディングは同じ瞬間に健康なイギリスの路上の娘にとって良い食事 *good eating* となる、その娘たちはフランスの小人たちと素晴らしい対照をなしている。この不幸が降りかかる哀れな奴の姿をホガースはプッサン [Nicolas Poussin 1594-1665 古典的な人物像と崇高な風景の代表者] の絵画から取ってきた。その絵画はホア・ツー・スタワーヘッド [Hoare zu Stourhead. おそらく Sir Richard Colt Hoare 1758-1838 銀行家] のコレクションの中にあるという、そしてザビニ人の略奪を表している。これらのものの後ろにはアフリカとヨーロッパの間のいくらか豊かな提携がある。娘の肥満はおそらく意図的にフランス人の婦人の平坦さに対置されている、ムーア人の粗野な官能性がダンス教師のプラトニックなささやきに対置されているように。その娘はちょうどパン屋から一つのパイを持ってきたばかりだ。彼女が黒い知人にするおとなしい抵抗によって、またそれのいくらかが道路に流れる。それはだから三度目の *good eating* であるだろう、そして一目でこのキスがここで第四の一品として給仕されることを見ない人はホガースのいたずらっぽさを良く知らないに違いない。この二つの頭部がモットーのすぐ下にあるのは理由がないわけではない。まったく前方におそらく Hog-lane の不純さに一撃を与えるために、投石によって死刑にされた猫が横たわっている。ひょっとしたらまたついでに同時に五度目のそして最後の *good eating* として。

夕方 Evening

夕方 Der Abend

イズリントン [Islington] の地域、ロンドンの北側近くの大きな村の蒸し暑い九月の夕方。この地方での本当のロンドンの市民層の公共的な娯楽のためのいくつかの場所の中で、そこにもまた一つの建物、サドラーズ・ウェルズ *Sadlers Wells* [1683年に Sadlerによって設立された鉱泉飲用療養場] がある、そこでは夏にすべての種類の劇、喜劇、綱渡り、鉄線綱渡り [Drahttanz]、梯子曲芸、曲芸 [Luftspringerei] が大きな楽し気な人々の集まりの前で与えられる。その集いはもちろん輝かしいものではない、そして見られるために身分の高い男はそこへ行かない、しかし見るためにそこへ行くのは稀ではない。そしてそこで楽しみを見出す。一方でクロークの中の彼の正装の衣服と市民的な燕尾服の彼はお世辞言葉のすべてのや

ることなすことから遠く離れて休むのだ。その地方はとても爽快な気分させるものを持っている、そしてこれらの版画の解説者は、彼がこの空のもとで友人たちと過ごしたわずかの夏の晩をとて心地よく思い返すことなくこの版画を手にはほとんどない。[これらの版画の解説者がただ三日間だけその場所で過ごしたにもかかわらず、彼はこの版画をはじめて見たとき、自宅にいるように感じた。それは彼にカメラ＝オブスキュラの中に描かれているように見えた] ゲッティンゲンポケットカレンダー 1790年]

われわれの芸術家がこの小さな楽園を元気づけるために探した主要なグループは一つの市民家庭、青色染料師 [Blaufärber。以前は青色染料 Waid あるいは東インドの Indigo を表した、その裁ち布 (Stoffbahn) は空気に掛けて初めて青い色調を得る] と彼の妻からなっている。彼女は、身体的な形成と同様に、われわれがすぐに見るように、道徳的な形成によれば、空想をわれわれの最初の両親 [アダムとイヴ] に向けることに特に器用であるというのではない。彼らは三人の子供たちを連れている、そして四番目の子供に芸術家は大きな希望を抱かせた。前をゆっくりと家族の犬が同じような良い希望の強い表情とともに歩いている。すべての人は疲れていて、不活発で、重い、そして - おお、何と暖かいことか! * 主婦 [Hausehre 家の名誉] はこれをもっとも多く感じている。彼女は、見てのとおり、良いものと美しいものの限界をいくらか超えすぎて栄養を与えられている。気球のような胸 [モンゴルフィエ [熱気球を上げた] ふうの Gorge à la Montgolfière], モンゴルフィエふうの希望 [à la Montgolfière]! 愛しい時よ、なんと困難なことか! シェークスピアはかつて春の朝に露の真珠をすべての西洋さくら草の耳に掛けさせた [真夏の夜の夢]。ここのわれわれのカリフラワーのもとで蒸し暑い夕方は似たことを試みた。そして一つの真珠を、耳の隣を過ぎて、髪の下に掛けた、それはしかし単なる誤った措置であったように見える。夕方はまさしくいまその誤った措置を修復しようとしている。その真珠はすぐに耳たぶに掛かるだろう。一つの手には彼女は愛しい夫の帽子と手袋を持っている、夫の方はその代わりに子供と彼に天によってたいそう強い振幅を与えられた妻の一部を引っ張っている。というのは、実際に彼女は、彼女が扇子をもっている手で夫の肩の上に休んでいるのだ。その扇子の上には古代からのグループが表現されているのが見える、そのグループは、ここのへり飾り帽子の小さな少年を加えるならば、現在のグループと類似性を持っている。アモル [愛の神] と一緒にビーナスとアドニス、今これらの人々はいくらかくつろいでいた。われわれの小さなシティー-アモルはパパの杖の上に乗馬している、そして彼の妹についての不機嫌を表明している、その妹は同様にすでに老いた顔とほとんどもっと古い衝動と弁才でもって彼の絵柄つきはちみつケーキをうらやみ、奪おうとしている。それはなんとという子供表情だろうか! 子供の顔の中の早い時期に印をつけられた容貌が一般に成熟した年齢における醜さの前身であるという

ことが確かであるならば、その子供たちから何が生まれるだろうか。その子供たちはあの無邪気な空っぽさの線、そしてすべての良いものと美しいものが容易に中に希望されるので、たいそう魅力的な空っぽさの線をすでに母胎の中で通過してしまったに違いない。アモルはここではアドニスの杖に乗馬している、そして帽子の上に帽章を着けている。アモルに一つの Cornet [騎兵隊]-職を与えるという考えは悪くない、今このわれわれの少年はまったく醜い Cornet である。要するにその少年は兵隊ではない、そして決してそうならないだろう。どこで彼はそんなに早くそれに至るだろうか、聖なる洗礼の隣に、赤いスカーフの秘跡が行われぬ国で。[新生児がすでに軍人に教育される国はプロイセンである]。それは単に子供遊びである。

- * ホガースは、この版画の最初の印刷の時にその男の手を青く、婦人の顔と胸を赤く印刷させる奇妙な思い付きを持った。青色染料師 [Blaufärber] の男と青色染料師の女の赤い熱を暗示するために。しかし一人の友がそれを続けることを忠告してやめさせた。それ故にその印刷は極度に稀であり、高価になっている。これは偽造にきっかけを与えた。しかしながら本物でない作品は一つの色で上塗りされているが、それに対して本物の作品の中では単に線が着色されていて、その間にある紙は着色されていないので、注意深い買い手は容易に騙されないだろう。

ちょうどこの夫婦の後ろで牝牛が乳を搾られている、その牝牛のモンゴルフィエふうの乳房 [Eiter : Euter] はその地方と幸福な土地の豊かさの魅力的な象徴である。しかしながらその際に一つの不吉な悲しい状態が起こる、それは感情のすべての夫を残念がらせるだろう。すなわちこの牝牛は頭の飾りをわれわれのアドニスにとっても姉妹的に伝えるので、人々はそれは両者のうちのだれの所有物なのか不確かになる。つまり青色染料師のか、それとも牝牛のか。おお！ マダム、マダム！ かわいそうな奴、お人よしのおとなしい女-馬は著者ではなく、単に出版者である。[著者と出版者の立場の相違を暗示する比喩] 出版者にとって、それは暑い天気の時にもどのような状況であろうか、もし彼がそれを半分だけでも知っているならば！ とりわけ、腕の上の出版社記事 [Verlags-Artikelchen] において。その記事はスカーフのところで彼をとて粗野につかんでいるので彼の顔はそれで膨れるように見える！ 一つの靴が子供から落ちた、それは下の地面の上に横たわっている、おそらく単に長靴下を通して完全に現れ出ている裸のかかちを見せるために。主婦としてのわれわれの愛の女神の価値の雄弁な証明、牝牛の頭の飾りが妻としての愛の女神の雄弁な証言であると同様に。

そのすぐのところには飲食店がある、豊富に蔓を出しているブドウの木と重いブドウの房と掲示標識がある、そこでわれわれは数瞬間でもとどまりたいと思う。

そこに肖像画が掛かっているが、その男はサー・ヒュー・ミドルトン Sir Hugh Middleton [1560-1631] である、ロンドンの金細工師で、仕事において最高に功績のある男である、彼は一般に確かに不可能とみなされていたことを実行した、つまりロンドンに国の内部から新

鮮な水を用意すること。彼は1608年から1613年まで20イギリスマイルの水道を通した。ハートフォードシア [Hertfordshire] から、いわゆる新しい流れ (*The New River*) を。それがここを流れて行く水であり、そしてちょうどその水の中を喉の乾いた [それが雄豚 Eber になるまでの] 若いオスの豚 [Betze] が欲望と優柔不断な怠惰とともに見下ろしているのである。彼はその企ての際に彼の財産を失った、彼の報酬全体は新しい負担だった。財産のない貴族。私は彼がその他に記念碑を受け取ったことを知らない。ロンドンの金細工師のギルドホールに掛かっている彼の肖像画を除いて、そしてこのビール標識を除いて。これはいくつかの有益な考察に導く。

イギリスですべての功績のある男は生活の中で銀器から食事をし、死後は大理石の覆いの下で休むと思うならば間違っている。多くの人々のようにそこでも一生の間、手づかみで歩きながら食べる、そして最後に、彼がそれを見出すならば、飲食店の標識の上に自分の記念碑を見出す！ しかしもちろんそのような記念碑は、その男が悪い人間でなければ、悪くない。家々自体が標識の上の名前にふさわしく保たれるならば、標識は不滅である。石の記念碑は、それが一度破壊されるならば、再び建てられることはない。飲食店の標識は修復され [renoviert] そして修復される [renoviert], それから完全に新しくされる, 世界の終わりまで。今まで多くドイツのパンテオンについて話された、私はこの方法でそれは実現されると考える。そしてドイツ的が昔から良いと安価と同じくらい多くを意味しているならば、飲食店の標識の上のパンテオンは本当にドイツ的なパンテオンだろう [おそらくドイツ人のパンテオンを作ろうという同時代の提案にたいするパロディ的な異文]。ひょっとしたら微笑むひともいるだろうが、私自身は本当に微笑まない。半世紀もの間、飲食店の看板から下で降りたり乗ったりする後世を見下ろすこと、あるいは後世によって見上げられること、それよりもっと名誉あることはあるだろうか。私はその考えが嘲笑されるだろうということを予見している、しかしまさにその考えが偉大であるので。太陽の中を見るならば、賢い顔をすることができる人間はほとんどいない。ライプニッツ氏のところに滞在することは、プロイセン王 [フリードリヒ二世] のところに滞在することよりもっと悪いだろうか。あるいはライプニッツはその車寄せの上方で、あるいは手すりのわきでプロイセン王よりもっと悪い宿を提供されているのだろうか。もし心を持っている人がいるならば、それを私に大きな声で言え。そして私は、以下のような箇所を占めることを恥ずかしく思う学者を見たいものだ、すなわち今まで地上の王や皇帝たちが、彼らの皇太子や王冠とともに、金色の天使が、太陽と月と星が、動物と野の王が、一つの頭あるいは双頭の鷲が、一つの尾あるいは二つの尾のライオンが、しばしば尾を持たない馬が、野原の上のユリやバラが、すべての華麗さの中のフランスのユリ [ブルボン家のユリ, フランス王の紋章。フランス革命時には王党派の記章]

やバラが軽蔑しなかった個所を。人々は都市全体を、ロンドン、パリとコンスタンティノープルをそのすべての住民とともに敬意を表すためにそのように看板として掛けなかったか。ここで看板の上にはまた熊、雄牛、山羊、明らかに猿に属しているムーア人もいと異議を唱えないでいただきたい。蛇と竜とガチョウもいると。しかしガチョウは金でできているにしても、常にガチョウのままであろう。それは反論ではない。というのは、昔から世界におけるすべての敬意表明はそのように経過したからだ、大理石の記念碑や勲章の大綬、叙爵書、博士学位記、称号と〔書物の巻頭の白紙の〕遊び紙〔Schmutztitel〕によって。そしてこれからもそのように、われわれすべての母である世界の終わりまで経過するだろう。悪魔自身がオルレアン最後の侯爵〔Ludwig Phillip Joseph 1747-1793 オルレアン侯爵、フランス革命時はジャコバン党員、国民公会でルイ十六世の処刑に賛成したが、それからギロチンにかけられた〕の姿の中で聖なる霊の勲章〔1578年にフランスのアンリ三世によってただ一つの階級を持つ最高の勲章として創設された。最初の聖職者ではない騎士勲章で、その標識は十字だった〕を身に付けていなかったか。－ ひょっとしたらこの道の上で最後にドイツの飲食店はいくらか改善されるだろう。そこではまだあちこちで悲しげに見える。われわれにはそもそもまだドイツ人のハワード〔John Howard 1726-90 英国の博愛家、監獄の改革を行った〕が欠けている、彼が牢獄のためにしたことを飲食店のためにするハワード★が。

★ ハワードのような人間のドイツを巡る旅は、ひょっとしたら小説のための悪い主題ではない。それはもちろん大きな飲食店知識を前提としている。

ドイツのパンテオンについてまだいくつかの言葉を。大理石のパンテオンを私は勧めたくない。最後に大理石のドイツ協会が生まれるだろうと予想される、その協会はわれわれの紙の協会以上の価値を持たないだろう。それどころかそれ以下だろう。私には思われるのだが、世界にはそもそも紙の記念碑以外の記念碑が存在するかどうかは大きな問題である、*伝統*がその大きな特権を印刷所に譲渡して以来、そして今その子供っぽい年齢においてその完全に正直なというわけではない小売業を都市-女 おばさん〔Stadt-Frau Basen〕を通して行っているときから。私はそれを信じない。われわれの同郷人たち〔Johann Hieronymus Schröder, Wilhelm Herschel, Nicolaus Copernicusのこと〕が月の岩の上に、新しい衛星を持っている新しい惑星を貫く宇宙システム〔Weltsystem〕の境界にそして惑星や彗星の軌道に建てた永遠の記念碑でさえも水平の紙の証明書なしには無である。アレクサンダーは、すべての他の追いはぎのように、彼のケーゼビーア〔Käsebieer（直訳すると「チーズビール」）、追いはぎの名前〕物語についての証明書を与えたいと一人の作家が思わなかったならば、忘れられていただろう。その証明書は今もそして常に修復〔renoviert〕、修復されて〔renoviert〕世界の

中を走り回るのだ。永遠の死後の名声の寺院への旅の途上で一番近い駅でいずれいくらか金や銀などがはげ落ちる。しかしさらに旅を続けようとするものは、紙のお金なしには前進しない。今、紙ではないものを考えてみよ。亜麻の繊維 [Flachs] の野原、なんとという眺めであることか！ 物理学者は言うだろう、どのような物たちが潜在的でないだろうか！ そのような野原を馬車で通り過ぎる人、あるいは馬に乗って通り過ぎる人、あるいは歩いて通り過ぎる人は、帽子を取れ、そして一度潜在的な袖口シャツばかりでなく不死について考えよ。他のことをしたい人がいるならば、私は飲食店看板へ行くことを勧める。というのは、それらは、大理石が一般に知られている一方で、紙のすべての不滅のものを所有しているからだ。— この飲食店の標識についてはこれくらいで終えよう。今、飲食店自体についていくつかの言葉を。

押し開けられた窓を通して、輝かしい社交会は自殺に対するジョンソン博士の手段 [煙草を吸わなくなって以来、自殺が増加したとジョンソン博士は書いた] を大きな協調の中では必要としないということがわかる。ここで愉快的ことは (というのは、ホガースは何も理由なしにはしないので) これらの人々が田舎の空気を楽しむことを意図して明白に煙の都市 [ロンドン] を離れ、そしてここで今煙の部屋の中に自分を閉じ込めているということである。ここの窓際のこれらの人々はまだ一番良い場所を持っている、その後ろにまだダースの人々が潜んでいることをわれわれは賭けることができる。というのは、影の窓のところでもこれらの人々にとってはとても暑く、彼らはかつらをとりはずし、毛を剃り落とされた頭の周りにハンカチをかけていたからだ。外では一人の男がブドウの木の隣に、好奇心にあふれた洗濯の娘が注意を喚起されるように、自分を置いた [洗濯女の好奇心と影口好きについてリヒテンベルク自身が悪い経験をした]。しかし世界全体の中でこの人間階級は洗うことと何も関係がないものごと、彼らが理解しないものごとを常に気にかけている。その後ろの靴を持った女が望むことは、私にとっては、本当のことを言えば、完全に明白であるというわけではない。解釈者はみんなそれを超えていく、まるで彼らが彼女を見なかったかのように。トラスラー [Trusler] を除いて。彼は、私に思われるように、とても本当らしいというわけではないことを言う、すなわち、「後ろのその女が女の子の (年上の方の娘の) 靴をもっと幅広くしている [weiter machen] ことは、この女が少年と同じくらい疲れているということを示している」。読者はそんなことは重要ではないと感じるだろう。しかしその後ろには確かに何か潜んでいる。— イギリス人は蹄鉄 *Hufeisen* を馬の靴 *Pferdschuh* と言う、そして馬が話題になっているところでは、ただ靴 *Schuh* と。彼らがその上、蹄鉄とその喪失についてのドイツ語においてはとても普通の話し方を持っているならば [「彼女は蹄鉄を失った」は「一人の娘が私生児を産んだ」の意味] — それを私は知らないのだが —、この

女性用の靴 *Schuh* はおそらく失われたものだろう、そしてそのようなことはおそらくサドラーズウェルズ [Sadlers Wells] では人々の身に起こるだろう、とりわけ人々が靴をいくらか軽率に履くことに慣れているならば。

夜 Night

夜 die Nacht

ホガースはここで、ただ太陽の位置に従えばその名に値する夜を表すことを良いとみなした。というのは、われわれはここで、他の三つの一日の時刻の場合と同じくらいよく遠方を見るからだ、そして標識や郵便馬車の上の一番小さな文字でさえ読むことができる。というのは、第一にここでは前景に一つの喜び-火 (*bonfire*: 焚火 [死と復活の象徴]) が燃えている。第二にそのすぐ隣に、一つの手さげランタンがある、第三に爆竹が投げられる、そのうちの一つは馬車の中の乗客たちの墓になるように輝いている。第四にこれらは一人の少年によってたいまつで火をつけられた、そのたいまつは火をある深い隅に送る、警察に何かを提示するために。第五に、樽のところで勉強している [lukubrieren: 夜に (明かりのもとで) -精神的に一働く] 男は彼自身の切り株のようならうそくを彼の粘土製の [lehm] 燭台とともに樽にくっつけた★。第六に、幾つかの家は照明を施されている。第七に月が輝いている。そして第八に、その眺望の別の端に喜びの火の向かい側に、一つの大きな悲しみの火、すなわち一つの家が焼け落ちる。ひょっとしたら有益な教えのために、一つの喜びの火の結果として。だから自然、芸術と偶然がここで芸術家にその光を与えている。エドム・ブルソー Edme Bourseault [1638-1701。モリエールとの文学的な争いによって有名なフランスの詩人。「Babet への手紙」] は、もし彼が彼のバベットにこの版画を説明するべきならば、言うだろう「ここには完全に昼を作るためには君の眼の輝き以外に何も欠けていない」。

★ この男は、国の中の汚れた仕事に身をささげる人々、そして冗談から英語で *Goldfinders*、金を見つける人 *Goldfinder* と呼ばれる人々の一人とみなされた。他の場合には彼らは *Nightman* という名前である、そして彼らの荷車は *Nightcarts* という名前である。*Nachtmänner* [夜の男]、*Nachtkarren* [夜の荷車]。これらの愚か者たちとこの仕事に一般的に捧げられた時間は、おそらくホガースのような男をそのようなものをここに置くように誘惑できただろう。(しかしもちろん、それ以外のものは世界の中で何も彼を誘惑できなかっただろう)。特選食品 [Delicatesse] の似たような不足はおそらく彼のもとにも見出される、そして実際にこの版画の上にも。しかしそれは確かに別のものだ。樽の

かなりの大きさ、そして荷馬車のわだちがまったくなくということ、それはすでに何かきれいなものを推測させる。アイルランド氏はここでとても正しい。ここで民衆に、われわれがすぐに聞くように、この喜ばしい晩に、強いビールの入った一つの樽をふるまうことが用意されている。そしてそれはここで満たされる。しかし注釈者たちは容易にはもっと悪く互いに争うことはできない。ここでは著者の責任がないわけではない。人々はそのいたずら者を知っている、そして彼からたくさん良いことを推測しない、とりわけ暗くなる中では。

これは五月二十九日の後の夜である [Oak Apple Day は今日でもチャールズ二世の誕生日の記念として彼によって設立された Royal Hospital の古参会員によって祝われる]、その日に、君主制とチャールズ二世の王政回復 (*King Charles's restration*) がこの大きな出来事の友人たちによって (そして誰がその友人でないだろうか) 喜びの火と照明でもって祝われる。それゆえにここでオークの葉が家のわきと帽子の上に現れるのだ。そこの星の下に立っている一本のチャールズのオークの木 *Karls-Eiche*★ [クロムウェルが勝利した Worcester の戦い 1651 年の後、チャールズ二世はオークの木に隠れ、救われた] の思い出として。この点において本当に芸術家の舞台は良く一つの感情でもって選ばれている。その感情の痕跡はこの作品の中ではまさに頻繁には現れない。というのは、これはロンドンのチャリングクロス [Charing-Cross] の地域であることをわれわれは知らねばならない。そこでは鑄造術の名作、不幸な王、チャールズ一世の立像が展示されている [Hubert Le Sueur のその騎士像は 1675 年に Whitehall の先端に建てられた]、それはここ遠方でも見える、そしてだからわれわれの芸術家はその立像をこれらの喜びに参加させるのだ。われわれの読者のうちのだれが憧れとともに、同じ不幸なルイ十六世の未来の立像がいつか似たような喜びの祭りの目撃者になることを願わないだろうか。われわれは芸術家のこの考えがすべての感情豊かな人間に及ぼすに違いない印象を、彼が前景に取り付けた気まぐれによって消し去らせてはいけない。偉大な健康的な民族の公共的な喜びの際にはそれと異なったふうには経過しない。どの存在も自分の仕方に従って喜ぶ。肉屋の小僧 (ここには彼らがいる) は侍従とは違った仕方です。そして同様にここに立っている飲み仲間は大司教とは違った仕方です。そしてそのような場合に確かに、この喜びを表現しようとする芸術家は一番賢明に行動する、彼は自分が太刀打ちできる人たちだけを選ぶのだ。

★ このオークの木については、それがまた模写されている別の場所でもっと多く言われるだろう。[ホガースの絵画・銅版画シリーズ「選挙」のこと]

前景の男の老人はひどく酔った、怪我をしたフリーメーソンである、完全な服装で、[植字作業用]ステッキをもち、革製前掛けをつけて[フリーメーソンの表章]。彼の額に血が滴っている。彼の口からワインが滴るように。彼は全面的に赤く燃えている、そして彼が幸運にも上の階から人工的な *Pisse-Vache*★ [Pisse: 小便] の流れに出会わなかったならば、燃え

上がるだろう。彼はその集まりの守衛室世話係と灯りの掃除人によって家に連れて行かれる、その世話人は彼から剣を取り去ったが、しかし杖をそのままにしておいた。このような署名された [signiert], あきらめた [resigniert] 頭蓋骨と声は杖を恐れない、しかし剣に対して知恵自体がだめになる。その老人はサー・トーマス・ド・ベール Sir Thomas De Veil [-1748。ロンドンの仲裁裁判所判事]の肖像だそうだ。サー・トーマスを知っていたサー・ジョン・ホーキンス [Sir John Hawkins] はニコルズ [Nichols] 氏に断言した、それは少しも似ていないと。一方、アイルランド氏は改めて断言する、それは、彼が見たこの貴族の一つの肖像画にとても似ていると。Grammatici certant [研究者の意見が一致していない、そして論争はまだ裁判官の前で停滞している。ホラティウス「詩学」]。十分だ。われわれは Pisse-vache の下の酔ったフリーメーソンを見る - しかしそれはたしかに団体 [Orden] への風刺ではない、少なくとも、真の団体への風刺ではない。それはむしろ酒盛りクラブや詐欺師クラブを指しているように見える、それらはフリーメーソンの支部集会所を名乗っていて、ロンドンのあらゆる街角にあふれている。おそらくその打撃はここに表されている評判の良くない家に向かう、the Rummer tavern, 旅館ローマ亭 [Römer]★★。そこではかつてフリーメーソンの支部が置かれていた。しかしそれが掲げている第二の標識、The New Bagnio (新しい入浴の、汗の、何々の家。[売春宿]) はそれがどのような種類のものであるかを明瞭に認識させる。

★ スイスの有名な自然の滝の尊敬すべき名前。[約 70 メートル]。

★★ 周知のごとく一種の広い、膨らんだグラス。

左手の家の一つの標識のついた床屋がある、その標識の上には一つの頭が模写されているが、その頭から一つの手は歯を優しく引き抜くだろう。もし歯が前もって手を食べつくさないならば。その標識は次の説明文を持っている、*Shaving, bleeding and Teeth drawn with a touch. Ecce Signum* その記号を見よ。ひげをそる、瀉血する、歯を抜く [Zahnausziehen] (もぎ取る *ausbrechen* と言うべきだろうが) 急に [mit einem Ruck]。ここで見られるように。押し開けられた窓を通して部屋自体の中が見える、そこでは実際に一つの老いた頭部に、標識が約束している手術の二つが実施されている、つまりひげをそることと瀉血が、急に。歯は抜かれていない、しかしその代わりにほとんど鼻が。じっと耐え忍ぶ女！ 処刑を行っている職人はその部屋に見られるように、同時に理髪師である。その男のあふれ出る口や彼の右の角度に曲げられたサーキュラーナイフをサー・トーマスの口と(植字作業用の)ステッキと比較すると、床屋はローマ亭の中のフリーメーソンの支部に属しているが、老いた紳士に仕えるために少し呼び戻されたと信じたい気持ちになるだろう。その老いた紳士は何のためにそんなに夜遅く彼のひげなしで済ますことを必要としたのか。 - その理髪師の陳列鏡戸 [Laden] の下に、かつてロンドンにたくさん存在していたような一つの公的な寝室

[Dormitorium] をわれわれは発見する。それは本当の泥棒-隊商宿 [Diebs-Karavansereien] で、そこでは両性の老いも若きもニワトリの平等と雄鶏の権利 [Hahnen-Rechten] とともにごちゃまぜに眠った。 - だからまたここでも Bagnio, 向こう側にまだ第三のそのように。

左側にソールスベリーの空飛ぶ郵便馬車 (*The Salisbury flying Coach*)★, まさにその飛行から休息し、足ののせ台に座ろうとしているところ。一方でそのうちとてもゆっくりした、とても重いドイツの勤勉馬車 [*Diligence*] (われわれは時々それを怠慢 *Negligenzen* と呼ぶべきだろう)はその前を這って進む時間を獲得するだろう。それが置かれている側に側溝がある、そして別の側に喜びの火がある、火はすでに一つの車輪をつかんだように見える。哀れな乗客たちは、彼らがここで洗われ [wäschen] たいのかそれとも焦がされたいのか早い決心を要求するジレンマよりももっと多く眠りに従う。寝室のところのその小さな悪人はおそらく爆竹を馬の方に投げた、そしてほとんど破裂する性急さで第二の爆竹に息を吹きかけている。馬車の少年たちは火を維持している肉屋の小僧である。彼らは旅行者の無事な到着に楽しく参加し、彼らを側溝のところで歓迎しているように見える。彼らのうちの一人は、床を濡らしてきれいにし再び乾かす雑巾 (*a mop*) を持っている。おそらく旅行者の集団を濡らしてきれいにするか、乾かすために。この用具はおそらく爆竹に対してふさわしいだろう。側溝が喜びの火にふさわしいように。

- ★ イギリス人が彼らの郵便馬車 [Postfuhrwerk] の座席 [Schlag] の上で空を飛ぶ *flying* について話すならば、われわれはまた *flying* を当てにすることができる。それは手紙の封筒 [couvert] の上の *cito, citissime* 速い、とても速いではない。彼らは約束を守る。ただ人々は時おりこのような小さな休憩をすることに労力を惜しまない。スペイン人はそれゆえにもっと良くする、彼らはロバによって引かれる郵便馬車の上に *Seguridad y celeridad*, 確実に速くと表示する。そして同様に約束を守る。ドイツの郵便馬車は最も賢明である、それは何も約束しない、そしてだから自分が欲することをす

ここでこの場面のすべての風刺が少なくとも片づけられていると誰が信じないだろうか。しかしながら風刺はまだ半分も述べられていない、風刺は本来今初めて始まるのだ。すなわち標識の上にくらか広く誇らしく風変わりな華美な紳士が掛かっている、そしてその後ろの下にわれわれは彼の名前を読む、*The Earl of Cardigan*。(カーディガン伯爵) [Thomas Brudenell]。これは空飛ぶ馬車の発明者である。彼はだからここに、その下の実行を見るためにそこに掛かっている、いわば彼自身の作品の墓の上方の墓碑銘として。他の人たちはこの男の速いそしてしばしば不注意な走行に対する当てこすりをする。しかし何であれ、そうして彼のためにその教訓はすばらしい。そのようなことを大理石のパンテオンの中の彼の肖像は決して体験しなかつただろう。

最後にとても目に付くわけではない筆使い [Zug] を一つ。しかしそれに気づくとすぐに、その版画全体の上の一番美しい筆使い。その彫像の前に家財道具を積んだ一台の荷車が見える。それはそっとずらかろうとし、それ故に夜に出かける人たちである、しかし彼らは、計画と取り決めがひょっとしたらすでにいくらか前もって定められたので、とても不幸である、照明のある夜に出くわしてしまったばかりか、またこれらの火の間に陥ってしまったので。そうしてわれわれは、包囲された人々の光の円形のもとでのように、彼らのベッドや椅子や彼らの陰謀全体のシルエットを数百歩離れて見ることができるのだ。彼らが彼らの債権者によって見つけれられるならば、それは損害賠償 [Restoration。チャールズ二世による君主制の原状回復の暗示] なしには片づけられない。

アンカスター公爵 [Ancaster 1714-1778] はオリジナル絵画の朝と正午を 57 ギニーで、サー・ウィリアム・ヒースコウト [Heathcote] は晩と夜を 64 ギニーで買った。

[第一分冊 終わり]

訳者の後書き

これは、ゲオルク・クリストフ・リヒテンベルク (Georg Christoph Lichtenberg 1742-99) の「 Hogarth の銅版画の詳細な解説」の第一分冊の翻訳である。Georg Christoph Lichtenbergs ausführliche Erklärung der Hogarthischen Kupferstiche. In: Georg Christoph Lichtenberg Schriften und Briefe. Herausgegeben von Wolfgang Promies. III. Zweitausendeins Verlag. Kommentar zu Band III 1961

私はリヒテンベルクの「手帖」Sudelbücherの翻訳(リヒテンベルクの手帖)全三巻(一巻は索引)を鳥影社から出版する予定であるが、その中で、特に Orbis Pictus (世界絵地図)や日記(SK)の中で頻繁に言及される「Hogarth銅版画解説」を同時に読んできた。そして翻訳を試みた。ルートヴィヒ・ホール(「覚書」晃洋書房 2016年 吉用訳)は夢の発見とドイツ語の散文の規範としてリヒテンベルクの「手帖」を評価していた。そのホールに導かれて私はリヒテンベルクを読み始めたのだが、私の関心はリヒテンベルクの散文(言語表現)であった。18世紀後半は思想的には啓蒙主義の時代であるが、近代国家の正書法に基づいた規範としての「国語」(ドイツ語)はまだなかった。ゲーテ、シラーの古典主義においてそれは確定されたとと言えるだろうが、そもそもドイツが近代的な意味で統一されたのは19世紀の後半である。ドイツ啓蒙時代の代表的な思想家はカントであるが、カントは哲学、

レッシングは劇作品の分野である。そこで散文のモデルとしてリヒテンベルクの文体が注目されるのだが、「手帖」は覚書、ノート、日記的記述であり、リヒテンベルクが公表を考え、書き上げたものではない。彼がいわば完成稿として提示した散文、文体はどのようなものであるか、それが私の関心だった。「ホガース銅版画解説」の文体は、「手帖」でのような省略、断絶、飛躍は少ない、句読法もおおむね理解可能である。しかし、これが *Periode* [双対文] というのだろうか、文はかなり長い。さらに、バロックのスタイルだそうだが、外来語が多い。ラテン語やフランス語は翻訳なしに挿入されている。一方で英語は翻訳されている。当時、英語の方がより「外国語」であったのだ。特にラテン語が占める位置には驚かされる。リヒテンベルクの最初の論文は天文学についてラテン語で書かれていた。本文を見てわかるように、リヒテンベルクにはウェルギリウス、タキトゥス等のローマ古典期の文が自然に心に浮かぶらしい。彼は物理学の教授であったが、フランシス・ベーコンの *novum organum* (1620)、ニュートンの *Principia mathematica* (1687) などラテン語は学術言語としてあったのだろう。いずれにせよリヒテンベルクは多言語的な言語環境の中にいた。それで美的には煩わしいかもしれないが、ドイツ語以外の言語は原語を本文中に記した。(現代の日本語の文の中のカタカナ表記の外来語の存在を考えると、この多言語性は異常ではないと思う) リヒテンベルクは機知で有名であるが、彼はメタファー、比喩、アイロニー、パラドクスを頻繁に使用している。連想が増殖、飛躍し、それを描写するので文が長くなるように思う。その連想もかなり特異なもので、理解できないところもあるが、そこは字義通りに訳した。文中の () と★はリヒテンベルクの本文のもの、[] は翻訳者の注である [Wolfgang Promies の *Kommentar zum Band III* を参照した]。またイタリック体は本文による。

私はリヒテンベルクの文体は彼が自然科学者であることと関連していると思う。リヒテンベルクは人間の本性を自然科学的に観察しているように見える。「シェークスピア、ホガース、ギャリック [シェークスピア俳優] についてどのような作品が書かれるだろうか。彼らの天才、すべての身分の人間の直観的な知識、他の人たちに言葉と銅版画彫刻用の鑿、身振りによって理解できるようにされたそれの中には、似ているものがある」(「手帖」F 37. 1776年五月八日)。芸術のジャンルは異なっても、人間本性 *human nature* の探求が問題となっている。その際に自然科学的な論理的厳密性が念頭にあるリヒテンベルクとしては、アイロニー、機知、パラドクスが形式として重要になる。そして機知や反語の文学形式はアフォリズムの短い文に適している。リヒテンベルクは [Doppelter Prinz 二人の王子] (二人の体が合体した子供) を機知的作品として試みたが、完成しなかった。スウィフトの「ガリヴァー旅行記」がモデルとしてあったが、リヒテンベルクの機知の文体は小説には向いていないよ

うに思う。機知は短い文で完結し、小説全体を構成することが難しいのだ。ドイツ精神についてはロマン主義（19世紀の思潮）的な観念性、神秘性、曖昧さが言われるが、リヒテンベルクは啓蒙主義の代表的な人物、自然科学者であり、イギリス的な経験主義に親和していた。文学的にはローレンス・スターン[1713-68]、ジョナサン・スウィフト[1667-1745]、フィールディング[1707-54]が彼のモデルだった。そして小説を書かなかつたが、「ホガース銅版画解説」はリヒテンベルクの「小説」であると言ってよい。ホガースが銅版画で表現したものの - 絵の小説 - をリヒテンベルクは言語で表現した *novelize*。彼は外国人であったので、イギリス人なら当然のものとして言及しないことも記述した、その結果、18世紀のイギリスの風俗絵巻が生まれたのだ。それはリヒテンベルクの *on the human nature* である。人間とはなにかが、概念的に考察されるのではなく、人間の顔の表情、振る舞い、生活の諸相において具体的に観察され、描写される。リヒテンベルクはラーヴァーター [Johann Kaspar Lavater 1741-1881] の観相学 *Physiognomie* を厳しく批判した、ラーヴァーターのそれは骨相学であり、人間の頭部、特に額の形を「読む」ことを試みたが、それは恣意的で、自然科学的な合理性を持つことはできなかった。そこでリヒテンベルクは本来的な観相学、人間の表情を読むことをホガースの版画をもとに試みた。あるいは、ホガースの銅版画自体が観相学的な実験であった。ヴィンケルマン [Johann Joachim Winckelmann 1717-68] はギリシア古典美術を称賛し、古典美の概念を作り出したが、当時はまだ美学美術史の学科はなかった。精緻な図像学の概念もなかった。その意味でも先駆的な作品であると思う。リヒテンベルクはホガースを「物語画家」、「魂の画家」と考える。「滑稽な *droll*」、「滑稽な思い付き」、「滑稽な嘲笑」、「嘲笑中毒 *Spottsucht*」、「嘲笑者」、「繊細な嘲笑」、「気分的な嘲笑」[*launig*]、「陽気な気分」、「奇妙な気分」[悪ふざけ *Mutwille* の気分]、「風刺的な気分」、「奇妙な *sonderbar, seltsam* な天才」[奇妙な思い付き]「機知の創造者」、「いたづらっばい男」[いたづら者・道化 *Schalk*]。それらは解釈のいわば概念装置である。私はリヒテンベルクの「ホガース銅版画解説」とボードレルの「現代生活画家」（1863年）を比較検討したいと思うのだが、そこでボードレルは風俗画家のコンスタン・ギース [G氏] を「ダンディ」「フラヌール」の概念装置を用いて論じているが、それはリヒテンベルクの観相学と同質の方法である。

この「ホガース銅版画解説」はリーベンハウゼン (Ernst Ludwig Riepenhausen 1762-1840, ゲッティンゲン大学の銅版画家) の複製とともに出版された。私は複製技術時代（ベンヤミニック的な意味で）が自然となった時代の間人なので、最初このリーベンハウゼンの「複製」の意味にまったく気づかなかつた。彼はオリジナル版画を見て、ペンで筆写し、彫ったのだ。さらに左右反対になるので、鏡に映し、その鏡像を彫った。これはもう模写というより、第

二のオリジナルと言っていいかもしれない。最終の第五分冊にリーベンハウゼンの版画を載せることができると思う。それがなくともホガース銅版画解説を言語的作品として読むことができる。ホガースの「絵-小説」からリヒテンベルクの「言語-小説」へ。[Hogarth Riepenhausen でインターネット経由で見ることができる]

「ホガース銅版画解説」の成立について簡単に述べる。1774年から1775年までのロンドン滞在の時に、リヒテンベルクはホガースの作品をほとんどすべて手に入れたにちがいない。彼はドイツのホガース、コドヴィエツキ「Daniel Chodowiecki 1726-1801」に「ホガースの仕方に従って、男女のだらしないものと同様に有徳なものを表すこと」を勧めている（1777年12月23日の手紙）。ラーヴァーターの観相学との対決がホガースの「顔の画家」への関心を高めた。1785年にリヒテンベルクはホガース銅版画の詳細な解説を構想した。ゲッティンゲンポケットカレンダー「毎年、Dieterichによって出版された暦で、リヒテンベルクはそれに短文記事を載せた」の「ホガース銅版画解説」は1784年から1796年まで続いた。リヒテンベルクはそのホガース解説を誇りに思い、「この仕方で試みた最初の間人である」と語っている。そのポケットカレンダーの記事をもとに、1794年からホガースの版画解説の分冊が現れた。版画的な原本の調整はリーベンハウゼンによるが、ホガースの組み換えの際に犯された美の誤りのゆえに、全部で38の銅版画のうちの12はリヒテンベルクの解説の意味で左右が逆にされている。「巡業する女優たち」、「一日の四つの時刻」の「朝」と「晩」、「放蕩者の道」の第3、4、8版画、「当世風の結婚1-6」。「私は私の家族のためにこの仕事を決心した。私は私の暇な時間をこれよりもよく使用するすべを知らない、あなたを信頼して言うのだが、私はその最初の分冊のために30ルイドルを受け取った」と従弟に書いた[1795年2月20日]。「私の苦勞に対する報酬は契約によれば作品の売れ行きに依存している」。だから彼は肯定的な書評に頼っていた。1794年7月31日までに第一分冊の600部が売れた。リヒテンベルクはそれをカント、ゲーテにも送った。「それが所得手段でないならば、事柄全体がフランス革命と関連しないならば、私はとっくに放棄していただろう」[1799年1月31日、「手帖」SK 1030]。「ディーテリヒはまだ完成していない「勤勉と怠惰」〈第五分冊〉のシリーズのために80 St. ルイドルを支払った」。「君が作品 Operi にした賛辞は私にとって最大の勝利である。本当に私はそれよりももっと大きな報酬を要求しない」[1795年6月15日兄弟のLudwig Christianに]。

「ホガース銅版画解説」の全体の構成。それは1799年1月の死によって、中断された。

第一分冊

前書き

納屋の中で服を着ている巡業する女優たち

社交的な真夜中の談話あるいはポンチ酒パーティ

一日の四つの時刻 朝 昼 夕方 夜

第二分冊

前書き

情婦の道 第一から第六の版画

第三分冊

前書き

放蕩者の道 第一から第八の版画

第四分冊

前書き

当世風の結婚 第一から第六の版画

第五分冊

出版者の前書き

勤勉と怠惰 第一から第六の版画

第七の版画 G, 第八の版画 H, 第九の版画 ここに再び版画 G, 第十の版画 L, 第十一の版画 K, 第十二の版画 L と M